

2006年の世界の不登校研究の概観

— PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から —

佐藤正道

要約

日本の不登校の問題を考えるうえで、常に世界の研究に目を向け続けることは必要である。筆者は1980年から1990年までの研究の概観を行い、その継続研究として1991年から毎年、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の不登校との関連が考えられるキーワード school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal を持つ文献を分類してきている。その継続研究として2006年の文献124件について取り上げ分類し検討を加えた。

Key words : school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal

I はじめに

筆者(1992a)は、諸外国と日本における不登校の初期研究を踏まえた上で、ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の school attendance, school dropouts, school phobia, school refusal をキーワードとする1980年から1990年の400件あまりの文献を中心に各国別、年代順別に分類し、不登校研究の概観を行った。不登校の問題を考える上で、日本国内ばかりではなく世界の研究に常に目を向け続け、1年毎の形式で蓄積していくことは意味があると考え、1991年からそれぞれの年の文献について継続研究を行ってきた(1992b,1993,1994,1995,1996,1997,1998,1999,2000,2001,2002,2003,2004,2005,2006)。

本研究は、2006年の文献についての継続研究である。今回の研究では、これまでの研究と同様、ERIC データベースと DIALOG データベースの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)を用い、文献検索を行おうとした。しかし、ERIC データベースは2003年の文献以降、データベースの検索形態を変更したため、2003年以降の文献については、年毎の検索ができなくなった。2006年の文献についても検索方法が変更のままで、同様の形態の検索ができない状態である。2006年の文献については、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS のみとなる。検索方法は、インターネット経由での作業を行った。これらの中から不登校との関連が考えられるものについて、キーワード毎に分類した。筆者の作業(1992a)に続くこの継続研究は、今回で16年目に当たるが、同一規準で16年分の作業をし、世界での傾向を把握する基礎研究の2006年分である。なお、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS での検索形態が変更になった段階でこの

基礎研究は終了することとする。

DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では、school attendance に関する文献が 314 件、school dropouts に関する文献が 179 件、school phobia に関する文献が 207 件、school refusal に関する文献は 106 件であった。

PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS データベース 806 件の文献の中で不登校との関連が考えられる 124 件について、キーワード毎に分類し、研究の概観をする。

II 各キーワード毎の研究の概観

ここで取り上げる研究は、2007 年 6 月現在、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS (PsycINFO データベース)において検索し、不登校との関連が考えられる 2006 年分として収録されている文献である。ここでは、日本の高等学校に対応する学年までの不登校との関連が考えられる文献を取り扱っている。

1 school attendance に関する研究の概観

2006 年の school attendance をキーワードに持つ文献は 314 件が見いだされる。これらのうち、ここでは 21 件を概観する。国別では、アメリカ合衆国が 14 件、ブラジルが 1 件、サウジアラビアが 1 件、エジプトが 1 件、オーストラリアが 2 件、英国が 1 件、中国が 1 件である。

Magnuson ら(2006)は、移民の子どもの就学前の登校と学校へのレディネスとの関連を分析するために、早期の児童期の縦断的研究から幼稚園の集団のデータを用いた。ネイティブの子どもと移民の子どもの登校に向けてのレディネスに関して就学前の効果に対する多変量回帰分析を評価した。結果から、母親が合衆国以外で生まれた子どもは、他の子どもほど学校やセンターを拠点とする就学前のプログラムに登録されていないことが分かった。就学前の登校は、他の子どもに対してと同様に、移民の子どもにとっても読書と算数の得点をあげることが分かった。就学前の登校は、移民の子どもの英語の上達にも貢献した。研究の主な焦点ではないが、Head Start の効果を調べ、このプログラムが子どもの英語力を改善することが分かった。母親の学歴が高校教育以下である移民の子どもに対しては特に大きな効果があり、Head Start は算数の得点を改善した。ネイティブの子どもと同様に、就学前の登校が移民の子どものためになり、移民の子どもが登録されなければ、調査結果から、就学前の登校に移民の子どものより多く登録することが、就学の技能においての不平等を減少させた。

Matthews(2006)は、school attendance にも関連するが、school dropouts において取り上げる。

Kearney(2006)は、school attendance にも関連するが、school refusal で取り上げる。

Konstantopoulos(2006)によると、生徒の成績に関する学校の影響が、最近の四半世紀、学校影響調査で、大きな関心を持たれてきている。3つの国家的規模で利用可能な高等学校の調査、NLS:72,HSB:82,NELS:92 を用いて生徒の成績に関する学校の影響の傾向を調査研究している。階層的線型モデルが、学校の影響を調査するのに用いられた。生徒の成績での変化のかなりの部分が、学校間ではなく、校内の要因にあるということが明らかになった。時間が経つにつれ

て大きくなる学校間の変化も見られた。学校は、1970年代より1990年代に一層多様化、隔絶されてきている。生徒の日々の登校、大学準備クラスの生徒、高校卒業のような生徒の特性や、学校や地域、学校の社会経済的状态を反映する校風は、平均的な生徒の成績の重要な予測要因となる。調査をとおして、平均的な生徒の成績の50%以上が学校の予測要因によって説明される。生徒の成績に関する重要な教師の影響を示唆する校内での達成においては、教師の異種性が見られたという。生徒の成績における教師の異種性は、学校の異種性よりも大きく、教師の効果が数学と科学についての生徒の成績に関して、学校の効果よりも相対的に大きな影響を与えた。

Graeff-Martins ら(2006)は、school attendance にも関連するが、school dropouts で取り上げる。

Smith と Brun(2006)は、地域社会と学校を拠点とする家族リソースセンターを州全体で実現される、子どもにおける身体的感情的な健康の結果を測定するように設計され標準化された手段について説明している。評価チームによって選択された基準に基づく、身体的な幸福についての2つの測定、感情的、行動的幸福の4つの測定の記述的心理測定的情報、長所、短所が含まれている。

Phares ら(2006)によると、父親は、母親よりも子どもや家族の問題に対する治療処置には関わっていない。父親の治療へのかかわりの段階を概観し、子どもに対する治療処置において、父親の参加の考えられる障害を表し、治療での父親の係わりに関連する要因を論じている。父親を治療処置に関与させる経験的臨床的戦略は、治療過程に父親の参加を増加させるようにセラピストを支援することになる。

Al-Haggar ら(2006)は、バイオフィードバックによって慢性疲労症候群(CFS)に苦しむエジプト人の青年を回復させる際に用いられた認知行動療法(CBT)の効力を評価することを目的に研究を行った。慢性疲労の審査をされた298人から159人の青年が研究対象として適任であった。これらのうち、63件のケースが追跡調査ができず、完全なデータベースのある92件のケースを活用し、4件を除外した。登録されたケースの年齢幅は10~14歳で、男女比は1:2.5であった。これらの対象者は、サウジアラビアのイースタン州で私立学校と総合病院から募集され、いくつかのケースが同じ領域の個人病院で精神科医によって照会された。国際的なCFS研究集団の推薦に従って、すべてのケースがCFSと診断された。患者は任意に2つの集団の1つに割り当てられた。治療介入群は、18カ月の期間にわたって患者の活動パターンにより、2つのプロトコルを適用しながら、50ケースを包括し、バイオフィードバックで支援された認知行動療法を受けた。42のケースが追跡調査され、症候学的に治療処置され、統制群として用いられた。データは、SPSSバージョン10.0を用いることで処理され、分析された。最も一般的な兆候が睡眠、頭痛、筋肉痛を回復しなかった(それぞれ95.8%, 67.7%, 50%)。治療介入群の患者は、いくつかの自己評価されたCFS兆候の消滅によるチェックリストの個々の強さ(減少が23.1%, 95%の信頼域19.2~25.4%)と、より良い登校状況(増加が31.5%, 95%の信頼域の29.8~36.6時間/月)の、著しい改善が見られた。バイオフィードバックによって支援された認知行動療法は、

心理療法の設定をしている間に、ストレス要因を考慮し、要因を低下させ、慢性疲労症候群に苦しむ青年の治療処置で非常に効果的であった。

Seif el Din (2006)によると、物理的環境、学校規模と学級規模、生徒と教師の割合、課外活動、児童の相互作用が含まれた。積極的な結果は、十分な教育と学級での賞賛を利用することで生まれた。メンタルヘルスプログラムに積極的に係わる教師は、子どもの世代に到達できる。発達原理で受け入れられた訓練は、学齢時の児童のメンタルヘルスの問題を特定するのに熟練したものになりえた。学校はもちろん大部分の児童の生活の重要な部分であり、11年の間、子どもは、学級で時間の多くを過ごしたいと思っていた。最近まで、子どもが十分な潜在力を発達させる上で、他の学校よりもなぜいくつかの学校で成功するかについては、英国のような国々では、比較的学問的な興味は持たれていなかった。大部分の親は、子どもが受ける教育の質に関心を持ち、学校、公式の教育課程、一般的な特質が学力的な達成と同様に、人格的発達に関する重要な効果を与えるものと考えられる。対照的に、発展途上国では、教育的用具の量に多くの関心が向けられている。親と教職員は、子どもの発達段階と子どもにとって必要なことに十分には気づいておらず、これらに当然の考察を与えることができなかった。10～19歳の男子の1/4と女子の1/3が中途退学であることを示したエジプトの国家的調査で示されたように、中途退学者の数を増やすことになるかも知れなかった。包括的なメンタルヘルスプログラムには、包括的な学校健康プログラムの一部で、すべての学年段階での健康教育を含むべきである。

Kuhnら(2006)によると、子育ての自己効力と呼ばれる親の役割における効力感は、幸福と積極的な子育ての結果に関連した。自閉症の子どもを育てるのに固有のストレスが加わると、親は幸福と自己効力の積極的な感覚を維持する挑戦がわかるかもしれない。この研究では、自閉症の子どもの母親の中で、母親の自己効力と子育ての認識力との関係を調査研究することを目的としていた。170人の母親に質問用紙かインターネットを通してのアンケートを実施した。診断以来の時間と障害のある第二子の存在の統制をし、階層的線形的回帰分析から、抑うつ、子育てのストレス、代理人、罪が独特な変化を説明した。自閉症の知識は、子育ての自己効力には関連づけられなかった。自己効力は、自閉症の子どもの母親の中で、幸福、代理人、罪の感覚と関連しているように思われた。親の幸福を支持するように設計され、子育ての認識力に焦点を合わせた親と家族を基盤とする治療介入は、子育ての自己効力を高めるかもしれない。

Blume(2006)によると、カップルと家族のカウンセリングの概観を先ず行っている。この分野での発展が、19世紀の起源から1980年代の自己喪失まで調べられた。次に、現代の家族研究、理論、治療法へ統合アプローチを広げている。中心となる章では、行動上、組織上、物語的、感情的で、精神的な見解の貢献を理解することに焦点を当てた。個々の用語でクライアントをしばしば定義する組織的な関係で、家族療法を行うときの、実践的な章を提供している。ケース研究、自己評価の実践、独学のための提案、現在の倫理規範を説明し、家族カウンセラーになることは、生徒と実際のメンタル・ヘルスの双方にとって、適任でダイナミックなリソースである。

Griner(2006)によると、歴史的に不利益を被ってきた人種的民族的集団出身の人々に提供されるメンタル・ヘルスサービスの有用性と品質を高めるためには、差し迫った必要性がある。これまで多くの著者が、より一層クライアントの文化的背景に合わせるように提唱された伝統的なメンタル・ヘルス治療処置を変更させてきていた。文化的に適合している治療介入を評価する数多くの研究がなされており、これらのデータをまとめるのにメタ分析的方法論を用いた。76件の研究の中では、平均効果サイズに重みづけをした結果として起こる無作為の効果は $d=0.45$ であり、文化的に適合している治療介入の適度な強さの利得を示している。特定の文化的な集団を対象とした治療介入はさまざまな文化的背景出身のクライアントから構成される集団に提供された治療介入よりも4倍の効果があった。英語を除いたクライアントの母国語で行われた治療介入は、英語で行われた場合より2倍、有効であった。

Matosら(2006)は、家庭や学校環境の質によって提供された青年期の健康について、学校に対する親の激励が特定の効果を与えたかどうかに関心があった。10~17歳の6,903人の国家を代表する対象者がこの調査には参加した。身体健康、行動上の問題、不安や抑うつ状態、家族のコミュニケーション、学校環境、学校に対する親の激励について、測定が構成された。一連の回帰分析が、家族と学校の関係と同様に、家族、学校、青年期の健康、行動、不安と抑うつ状態の問題との関係を示す心理学的健康の生態学モデルをサポートした。デザインと標本抽出の制限にもかかわらず、結果から、学校に対する親の激励は、学校環境や家族のコミュニケーションが個別に示された効果以上に、青年期の健康に特定の積極的な効果があると考えることができることが示された。

Ericksonら(2006)によると、登校状況や学習過程の活動的な参加を含む正常な活動を妨げる慢性的な健康状態にあるかなり多くの子どもがいる。生徒の慢性的な状態の管理は複雑であり、統合されたシステムを必要とする。慢性疾患の管理を改善するモデルが医療システムと公衆衛生のために開発された。特定の慢性疾患の管理を提出し、学校での健康サービスを調整するプログラムが学校において行われてきている。学校、生徒、親、健康管理、その他の地域社会の提供者を結びつける包括的、統合的なモデルが欠落している。慢性的な状態を管理するための健康学習モデルが、児童に対する慢性的な状態の管理を改善する効率的で有効で、包括的な地域密着型のシステムを作成、提供し、支援するための7つの要素を特定している。

SmithBattle(2006)によると、十代の母親の成功は、高校を卒業することによって高められるので、十代の母親が学校に残り、卒業することができるように支援する高い優先権を学区は十代の母親に与えるべきである。十代の母親であるこれらの生徒の教育的達成、学校への切望、教育に影響を与える政策に関する文献を概観している。十代の者は、しばしばさまざまな教育的社会的な不利益の領域で、母親として子育てを始めるが、多くの十代の母親が、将来の機会を高めるために、再登校する。残念ながら、十代の母親の中で高まる学校への切望は、しばしば一貫した家族と学校の支持の競争的需要と不足により、いつの間にか損なわれる。学校看護師は、高校卒業を促進する政策と実践を擁護し、リソースを関連づけることによって、十代の母

親の切望を支持し長期間の成功に貢献することができる。

Giallo ら(2006)によると、兄弟姉妹は障害のある兄弟姉妹と様々な方法で適応している。兄弟姉妹の適応結果の予測因子として、子ども、親、家族の要因の領域を調査研究している。7～16歳の49人の兄弟姉妹と親が、(1)兄弟姉妹の毎日の苦勞と精神的高揚、(2)兄弟姉妹の対処、(3)親のストレス、(4)子育て、(5)家族の回復力について、情報を提供した。兄弟姉妹自身のストレスや対処の体験よりも、親や家族の要因が兄弟姉妹の適応困難の強い予測因子であることが分かった。特に、社会経済的状態、兄弟姉妹サポート集団での過去の登校状況、親のストレス、家族の時間と日課、家族の問題解決とコミュニケーション、家族の大胆に予測される兄弟姉妹の適応困難であった。兄弟姉妹の毎日の精神的高揚の認識される強さにより、兄弟姉妹の向社会的行動が予測された。危機と回復力の家族の水準が、兄弟姉妹自身のストレス源や対処源の体験よりも、より良い予測因子であり、兄弟姉妹の適応過程に対する家族や親の貢献の重要性を強調している。

Reid ら(2006)は、閲覽報告での登校に関する問題の分析と評価を行っている。研究対象は、2003年のOfstedによって制作された200件の報告からの対象である。報告の中の登校問題に関するコメントを7つの変数、登校に対して与えられた総合的な学校の評価、報告書に記載された学校の肯定的否定的特徴、学期休業の効果、学校の管理、リーダーシップの問題、社会経済的状態によって、分析している。無断欠席の範疇の使用がいくつかの学校で、相反して用いられていた。学期休業の間に生徒を引き取る親によって挑戦が引き起こされた。報告書は社会経済的状態、学校の位置や生徒の出入り口のような背景となる特徴の最低限の考慮をしていると考えられる。登校に対して与えられた総合的な平均点は、評価された学校のどの他の側面よりも低かった。軽減される環境を考慮せず、文字通り登校状況に対する政府の掲げる目標を検査官は解釈していた。

Mueller ら(2006)は、school attendance にも関連するが、school dropouts において取り上げる。

Ou ら(2006)は、シカゴの親子センター(CPC)の保育園のプログラムへの参加が22歳のときに、高校卒業、最も高い評定、大学進学のようなより高い教育的な到達と関連したかどうか調査を行った。研究の対象者には、シカゴ縦断研究の保育園群869人と比較群465人の1,334人が含まれていた。プロビット回帰分析を、性別、人種と民族性、家族のリスク状態を含む子どもと家族の特性に対する教育的な到達制御のグループ差を調べるのに用いた。結果は、CPCの保育園の参加が、より多くの教育を受けた年数(11.33対10.93, $p < 0.001$)、高校卒業のより高い割合(卒業証書あるいはGED66.9%対55.3%, $p < 0.001$)、大学進学の高い割合(23.0%対17.9%, $p = 0.055$)にかなり関連していることが示された。すべての下位群の中で、高校卒業に関して、性別の下位群だけがプログラム参加との相互作用効果を示した。男性は高校卒業のときに女性よりも保育園のプログラムから利得を得た。調査結果から、大規模な学校を基盤とするプログラムが成人期前半まで持続的な効果があるということが示された。

Neild ら(2006)によると、近隣の高校へのさまざまな代替手段の成長にもかかわらず、大都市

の学校制度にあるほとんどの生徒が、特定の住宅地域に提供される大規模で包括的な高校に依然として通っている。これらの学校の教育的な必要性の極端な集中がしばしば政策立案者、学校改革計画、地区の職員によってさえ見落とされている。近隣の高校に直面する挑戦を例証するために、1999年度のフィラデルフィアの9年生の主要な学業上の特性を調査した。近隣の高校の9年生のかなりの部分が2年間以上、9年生であることがわかった。1回目の9年生の多くも過剰年齢であり、国語や数学では2年以上低い学年レベルであり、8年生では不十分な登校状況であった。これらのデータから、人的資本と財政資本の大規模で持続した投資が、多くの近隣の高校、学業上の失敗に多くの危険要因を抱えている生徒に必要である。

Schwartz ら(2006)は、平均年齢約14歳の342人の対象者の学業上の約束の予測因子として人気と社会的承認に焦点を当てた短期の縦断的研究を報告している。これらの若者は連続した4学期の間、追跡調査をされた。仲間の指名目録によって、人気、社会的承認、攻撃性が評価され、学校の成績から学業上の約束に関するデータが得られた。非常に攻撃的であった青年については、人気の増加は、説明のつかない欠席の増加と評定平均の減少に関連した。社会的な承認における変化は、評定平均での変化や説明のつかない欠席では予測ができなかった。

Lam ら(2006)は、青年の注意欠陥多動性障害(ADD)傾向、多動性の有無、すべてのタイプの無意図的負傷の関係を調査している。2段階無作為のクラスタ抽出を用いた人口健康調査を行った。対象者は中国広西省の南寧の高校生であり、13~17歳の高校1,2,3年の青年男女の総人口から選択した。ADDに関する情報は、訓練された保健専門家による個人面接により収集された。無意図的負傷を含む他の情報は、自己報告健康調査アンケートにより収集された。1,429人の生徒のうち115人(7.9%)が、高いADD傾向であると特定され、340人(22.6%)はここ3か月で負傷を体験したと報告した。他の潜在的交絡因子に対する適応後、ロジスティック回帰分析から、低得点をとった人々(OR=1.68,95%CI=1.18-2.40)と比べて、ADD傾向で高得点をとった青年男女の約70%が負傷の増加するリスクを示した。ADD傾向は青年男女での負傷の潜在的危険因子として特定された。

2 school dropouts に関する研究の概観

2006年のschool dropoutsをキーワードに持つ文献179件のうち、関連の考えられる18件について概観する。国別では、これらのうちアメリカ合衆国が14件、ブラジルが1件、オランダが3件である。

Matthews(2006)によると、中途退学は有能な生徒に影響を与える重大な問題として取り上げられており、20%あるいはそれ以上が有能な生徒である(例えば、Pimm,1995,Robertson,1991)。ノースカロライナ州の縦断的データを、7年生として地方の才能調査プログラムに参加した7,916人の有能な生徒での高等学校中途退学率を調査するのに用いた。いくつかの先行研究と比較して、有能な人々の中途退学率は非常に低かった。すべての有能な下位群の中途退学率は、この全体の人々にわたって、1%未満であった。有能な生徒は、登校上の問題のために退学したり、コミュニティカレッジに通うために中途退学する一般の中途退学の母集団とは異なってい

た。

Yampolskaya ら(2006)は、フロリダ州の都会の大規模校の危機的状態にある高校生の GEAR UP 介入効果を評価するために、研究を行った。GEAR UP プログラムの目的は、学業成績を改善し、行動に関する問題を減少させ、怠学や長期欠席を減少させることである。GEAR UP の 447 人の生徒は、比較群、非参加群、低参加群、高参加群から構成された。参加水準は、学業、行動関連、社会的な行動のそれぞれの範疇に対して算定され、傾向得点は社会人口統計学的特性と識別変数に関する集団に一致するように用いられた。結果によれば、アフリカ系アメリカ人のような人種、性別が、プログラムの活動性での高参加に関連した。学業上の活動性に関してかなりの時間を費やした生徒がセミナーにわたって GPA 得点を改善し、行動に関連するサービスを利用し、社会的活動にかなり参加した生徒が懲戒的照会を減少させた($p < 0.05$)。

Daniel ら(2006)は、15 歳での公立学校での典型的な読書の若者と比較して、貧弱な読書の若者での自滅的な観念構成、自殺未遂、中途退学の危機を調査することを目的として研究を行っている。将来を見越した自然主義的研究で、自殺の観念構成と自殺未遂、精神医学的変数と社会人口統計学的変数、中途退学についての情報を得るために、若者と親は、繰り返される調査研究評価に参加した。典型的な読書の若者よりも、社会人口統計学的変数と精神医学的変数についての統制後でさえ、貧弱な読書力の若者は、自滅的な観念構成や自殺未遂を体験し、中途退学をする可能性が大きかった。自殺傾向と中途退学は互いに強い関連があった。予防の努力として、読書に対して困難さのある若者が自殺や中途退学の行動に導かれる発達上の道筋と同様に、これらの結果の関係をより一層理解することに焦点を当てるべきである。

Wubbels ら(2006)によると、オランダでは、多くの欧州諸国のように、学級では、増加した文化的多様性を表している。オランダの教室での教師が必要とする個人間の能力に関する非常に限られた経験的に支持されたデータしかなく、生徒の母集団の構成の違いのために、他国からの研究を一般化することはできない。2つの学校での1人の専門の教師の徹底的なケース研究が引き続き行われる多文化的な学級における教師の経験に関する探索的研究に関して報告を行っている。一般的な個人間の教育能力とこの教師の能力を比較することによって、この教師がどの程度、多文化的な学級で、行動、知識、態度を教える特定の個人間の能力を表すかという質問に答えた。研究された教師は、異文化出身の生徒の特別な必要性を意識しており、積極的な学級の雰囲気を作り出し、さまざまな生徒の必要性を満たすために特定の教育戦略と個人間の手がかりを適用するのにこの知識を用いているように思われる。結果から、多文化的な学級を教えるには、この教師の個人間の能力の多くの要素が、一般的な教育能力の側面であると考えられる。多文化的な学級が、それほど多様ではない学級より重い要求をこの能力に置くように考えられる。

Orpinas と Horne(2006)は、いじめの予防を越えた児童青年の行動上の問題を理解し、治療処置をするアプローチを表している。いじめと攻撃性を減少させる二つの要素、積極的なケアをする環境の必要性和健康な関係に係わる子どもの社会的能力を発達させる必要性を強調してい

る。ここでは、予防と早期の介入に強く焦点を当てている。児童青年のための学習と生活の質を改善することに係わる最近の文献の概観も行っている。

Graeff-Martins ら(2006)によると、中途退学率は、発展途上国では、初等学校の生徒ですら、驚くほど高い。ブラジルの都市の公立学校での中途退学を減少させるために構成された介入パッケージの実行可能性と初期の効果を評価するために研究を行った。初等学校の学年では、同様に高い中途退学率の2校の公立学校を選んだ。一方の学校では、教師による二つのワークショップ、親への5通の有用な手紙、学校での3回の面談、学校への電話相談、1日の認知的介入を含む一般的な予防介入のパッケージが、1学年間実行された。連続して10日間理由なしに学校に関わらないようにした子どもに対しては、地域社会での精神健康評価とメンタル・ヘルスサービスへの紹介が提供された。2番目の学校では、介入が全く実行されなかった。結果として、1年間の介入後に、中途退学率($P<0.001$)と最後の3ヶ月間での長期欠席($P<0.05$; effect size=0.64)の間にかかなりの差が見られた。介入の行われた学校では、40人の危機的状態にあった生徒の中で、介入後に18人の生徒(45%)が学校に復帰した。教職員の適度の約束が主な論理的問題であった。危機的状態にある生徒に焦点を当てた一般的な第1の予防戦略と介入を結びつけたプログラムが、発展途上国で中途退学を減少させるためには、有効である場合がある。

Davis(2006)によると、人種と性の同一性の交差点についての研究は、学校での約束の過程を理解する上で重要である。アフリカ系アメリカ人の青年がどのように学校教育の内外で活動し、それらの体験を理解できるかに焦点を当てている。これらの青年がどのように男らしさの意味を構成するかを調査研究することによって、組織され複雑な学校教育の軌道が捕らえられる。国家的なオルタナティブ高等学校プログラムに参加した高等学校中途退学のアフリカ系アメリカ人の集団の定性的データを用いて、学校教育の経験と結果に対する人種と性の同一性のニュアンスを強調している。結果から、これらの青年の内省、後悔、社会的な償いの個人的な道すじの覆いを取ることによって、伝統的学校教育とオルタナティブの教育空間の間の社会的移動を強調している。

Jonker(2006)は、早い段階で学校を離脱した、進行中の政策の関心事となる、ケアワークに対する職業学校から中途退学した二人の生徒の話を解釈している。アムステルダムヘルスケアの学校で、150人の動機と切望の民族誌学的研究の一部として、3年間、この話は記録された。学級の民族誌学的面接と生物学的面接の組み合わせが、落第の内的な体験と外的な表現をもたらすことになる。中途退学者の話を再び聞くことによって、彼らの人生と学校の説話に異なった物語を関連づけた決まり文句を見いだした。これらの決まり文句は、自分自身をどのように見ると、学校でうまくいく機会を明らかにしていた。これらの痛みと見込みのなさの決まり文句は、彼らの学校での経歴を通して、教師が生徒を評価し選択するのに用いる別の強力な内在化されたラベルで作られる。

Friedman(2006)は、職業上の燃え尽き、特に、教師の燃え尽きを定義し、その進行過程を記述している。生徒との関係を含む学級、学校の機能への教師の期待を論じ、教師と生徒によっ

て知覚された学校と学級の真実の概観が取り上げている。教師の燃え尽きの来歴を詳述し、論じ、ストレスと燃え尽きの過程での教師と生徒の關係の重要な役割を強調している。教師の燃え尽きは、非の打ち所がない職業上の達成への理想主義的で愛他的な切望と期待の個々の夢の不一致による知覚された職業上の失敗の結果であると仮定している。この夢は、厳しい学級、学校、環境的な現実と相反するものである。

Booker(2006)によると、アフリカ系アメリカ人の青年男女に対して、学校への所属、同一性、約束の問題は、高等学校の学業成績と修了には重要である。既存の文献では、学校への所属は、教師のサポート、仲間との關係、動機、約束、学業成績にかなり関連している。この生徒の集団に対する学校への所属についての主な研究結果を概観し、調査研究のための今後の方向性を提供している。

Danielson ら(2006)によると、個人間の暴力の犠牲者であるということに対する青年男女の考えられる反応は、外傷後ストレス障害と抑うつ状態に限定されず、重要で否定的な影響を青年男女の心理学的肉体的健康に与えるかも知れない高リスクのある行動の発生を含む多くの発達上の影響にかかわるかもしれない。そのような高リスクの行動を特定し、以前の犠牲となった事件との考えられる關係を理解し、そのような行動を抑制することを示す介入を実行することは、これらの領域の間の潜在的相互的な相互作用を減少させるかもしれない。内在化した兆候を表す者よりも、問題のある外在化した行動に係わる若者に対するメンタル・ヘルスサービスに関するより大きな必要性があると青年男女の親が認識するかもしれないので、精神医学的実践での臨床医は、これらの關係を作る上で独特な立場にいるかもしれない。体験した個人間の暴力に関連する薬物乱用、非行的行動、危険な性的行動、自傷行動を含む高いリスクのある行動について、最初に述べている。次に、これらの人々に対して臨床医に適切な心理社会的治療介入を選択させるために、これらの有害な行動を取り扱うことが示された経験に基づいた治療処理を概観している。

Lubbers ら(2006)は、教室の中の仲間關係が生徒の学業上の進歩に関連するかどうか、もしそうだとすると、生徒の関連性と約束によって、説明することができるかどうかを Connell と Wellborn の自己体系モデルにしたがって調べることを目的に研究を行っている。多段階分析を用いて、オランダの中学の 796 学級の 18,735 人の生徒のデータを分析している。学業上の進歩を、評価の保留に対する翌年度の通常の促進、追跡システムでの上方移動、下方移動と概念化し、アメリカ合衆国の 7 年生と 8 年生と同等な 1 年と 2 年の間の期間に測定した。結果から、グレードを保留するか、追跡システムを下方に移動することが、彼らの仲間によって受け入れられた生徒では、比較的低い確率になっていた。仲間の受容は関連性と約束とに関連していたが、これらの変数は、仲間の受容がなぜ学業上の進歩に関連しているかを説明しなかった。仲間の受容と関連性は、より否定的な学級の雰囲気のある学級でさらに強く関係づけられた。

Magnuson と Duncan(2006)は、子どものテストの成績における、人種による差の家族起源の証拠を再検討し、格差の多くが黒人と白人が成長する経済的人口統計学的条件での違いにどれ

ほどよるのかを考察している。文献の概観によって、見積もられた格差の大きさが、研究にわたってかなり異なっていることが分かった。驚くほど一貫した結果が、家族の社会的経済的資源に関連する尺度の収集が、用いられた評価あるいは研究された対象者にかかわらず、黒人と白人のテストの成績格差の標準偏差の半分未満を占めているように考えられる。

Tobias (2006)は、例えば補助教育的リソースのように、動機づけ、関心、メタ認知、援助を用いるためのレディネスのような生徒の特性がウェブに基づく生徒の成功に対して特に有効かを調査研究している。更に、一般に、個別の学習、特にウェブでの結果に関する効果の理解について、これらの変数の関係を研究する重要性について論じている。

Brown (2006)によると、教育環境での人種民族的識別の認知を調べるために設計された研究に、99人の5~11歳のラテン系と白人ヨーロッパ系アメリカ人の子どもが参加した。一方が他方よりも教師から積極的な結果を受けたという、異なる人種と民族の二人の子どもが含まれるシナリオを子どもは聞いた。子どもは、その時に異なった結果に対する理由について尋ねられた。(a)状況により異なる情報(話の中での子どもと教師の人種と民族性、および教師の過去の選択についての情報)、(b)社会的な認識力(心の理論)、(c)子どもの帰属を識別することを促進する上での子どもの特性(子どもの人種と民族性と人種民族的態度)が評価された。結果によると、仕事の質や生徒の能力に対して、子どもが最も頻繁に異なった結果を考えていた。教師が同じ人種と民族性の子どもに報酬を与え、同様の行動の経歴であった時、子どもは、識別に対する帰属を最もしそうであった。状況により異なる情報に関する子どもの注意は、社会的な認識力によって加減された。子ども自身の人種民族性と民族的態度も、識別の認知に影響を与えた。

Muellerら(2006)によると、特に怠学が落第、中途退学、非行を含む問題行動に関連してきているので、学校管理者、教師、親、少年法職員は長い間、怠学の問題に関して関心を持ってきている。慢性的長期欠席のサイクルを壊すように設計されたプログラムと怠学防止には、遠く未来まで有益な効果があると考えられる。ここでは、複数の方法が、慢性的な長期欠席に対処するように設計された革新的なプログラムの過程と効果を決定するのに用いられた。質的量的なデータが、プログラムがどのように機能するか、治療介入に続く登校への効果を示すために提示された。

NeildとBalfanz(2006)は、school dropoutsにも関連するが、school attendanceにおいて取り上げる。

Klingnerら(2006)によると、第二言語の習得と学習障害(LD)の違いについての早急な学識を広めるフォーラムを作成することがこの研究の目的であった。英語学習者(ELL)の母集団が著しく成長してきていた。特別支援教育への英語学習者の不適当な紹介に関する懸念の増大、第二言語の習得と学習障害の特性の識別に関する挑戦、これらと関連する問題における研究の驚くべき欠乏があった。アメリカ合衆国の学校で読み書きができるようになるのに苦闘し、学習障害があるかも知れない英語学習者に現れている学識と研究の基礎を与えている。

Kemp(2006)によると、障害のあるなしに係わらず、生徒は驚くべき割合で中途退学している。それぞれの学校、学区、州の教育の部署が、しばしば異なった定義の基準と計算方法を用いるために、問題の正確な範囲が捉え所がないままになっている。なぜ生徒が中途退学するかという特定の理由は不確かであり、障害のある生徒とない生徒に対する目下の中途退学予防プログラムを有効にする研究はわずかしかない。中等学校の校長が中途退学率を計算するのに用いた方法、生徒が中途退学をしたと信じた理由、障害のある生徒とない生徒に対してどのような中途退学予防プログラムを用いたかを研究している。結果によると、中途退学率を最小にした計算方法を学区は使用し、障害の有無によらずに同様の理由で生徒は中途退学をしたとし、ほとんど経験的に有効ではない予防プログラムしか与えられていなかった。

de Barona ら(2006)は、アメリカ合衆国の急激に増加している少数民族の人々に対する心理教育的サービスの提供をするという挑戦を論じ、教育者が直面する問題を述べている。これらの問題はスクールカウンセラーと学校心理学者の役割と機能の簡潔な労作によって支えられ、いかにサービスの提供を促進しているかによる。

Iyamu と Obiunu(2006)は、school dropouts にも関連するが、school attendance において取り上げる。

3 school phobia に関する研究の概観

2006年の school phobia をキーワードに持つ文献 207 件のうち、関連の考えられる 56 件を取り上げる。国別では、アメリカ合衆国が 38 件、英国が 2 件、オーストラリアが 4 件、オランダが 4 件、イタリアが 3 件、カナダが 5 件である。

Higa ら(2006)によると、親子に対する社会恐怖と不安検査の妥当性と親子の一致について、10 歳から 14 歳、平均年齢 11.53 歳、5 年生から 8 年生、87 人の少女を含む、計 158 人の生徒と介護者の人種的に多様な対象者を調査研究している。児童は、児童に対する社会恐怖と不安検査を行い、介護者は親に対する社会恐怖と不安検査と児童行動チェックリストを行った。親子に対する社会恐怖と不安検査は、十分な内的一貫性を示し、児童が自己報告した社会不安とかなり関連した。検証的因子分析は、5 因子モデル上の 3 因子モデルをサポートし、併存的妥当性が証明された。

Storch ら(2006)によると、児童青年に対する Liebowitz 社会不安尺度(LSAS-CA)の因子構造を評価するために研究を行った。様々な臨床研究の要素として、225 人の児童青年に LSAS-CA が行われた。さらに、精神病理学と損傷のその他の測定が、サンプルの下位群に行われた。不安と回避の格付けに対する社会的相互作用と達成についての下位尺度の検証的因子分析は、不十分な適応指標をもたらしている。探索的因子分析は、LSAS-CA の不安と回避の格付けに対する比較的高次の因子で 2 因子の解法を支持している。項目内容に基づいて、因子は社会達成と学校達成と名付けた。因子の内的一貫性は高く、収束的妥当性と弁別的正当性は、抑うつと社会不安の尺度、損傷と機能の臨床医の格付けによる相関関係と相対して支持された。研究結果によると、社会的達成と学校達成の相互作用における社会不安と回避を測定する 2 因子の解法

によって不安と回避の格付けについて説明することが最良である。この因子構造は、児童期の社会恐怖を評価するためには、信頼でき有効な枠組みであると考えられる。

Hofflich ら (2006) によると、児童の身体的不平は、内的障害、特に不安障害と関連している。特定の不安障害と関わる特定の身体的不平を調査研究している研究はほとんどない。この準実証的研究は、全般性不安障害 (GAD)、社会恐怖 (SP)、分離不安障害 (SAD) のある子どもと、不安障害がない子ども、7~14 歳の 178 人の子どもの身体的不平のタイプと頻度を調べている。治療処置を求めた子どもと親が構造化された診断面接を受け、子どもは、多次元項目不安尺度 (MASC) を行った。不安障害がない子どもと比べ、不安障害があると診断された子どもは、より頻繁に身体的不平を報告しているが、身体的不平は主要な不安障害群にわたって異なっていない。重複障害と抑うつ障害のある児童は、重複障害のない児童よりも頻繁に身体的不平を報告した。結果は、診断システム内の基準として、回避過程の一部として、身体的不平によって論じている。

Hadwin ら (2006) は、脅威に対する情報処理過程の歪みを児童において展開する 1 つの潜在的な道筋として子育てについて調査研究を行っている。成人の不安に関する文献における理論的モデルと実証的研究に関する関係において、児童期の不安における情報処理過程の歪みを概観している。成人のモデルが、児童の情報処理過程の歪みを調査する理論上の枠組みを展開するためにどのように用いられ、適合させられたかを考察している。児童の情報処理過程の歪みの展開と子育てとの関係を理解することを明確に目指す研究を考えている。ここでは、子育てにおける起源と同様に、より明確な理論上の枠組みが児童期の不安における情報処理過程の歪みの意味を理解するのに必要であると結論づけている。

Biederman (2006) によると、これまでの研究では、児童期の不安障害はパニック障害に対して一義的な前例であることが示されている。この研究では、照会をされていない多くの対象者において、パニック障害に対する潜在的な前例の障害として、児童期と青年期の双方の重複障害を調査研究している。注意欠陥多動性障害 (ADHD) の障害のあるなしについて元々確かめられた対象者から発端者の家族研究で導き出されたパニック障害の 58 人の対象者と 960 人のパニック障害のない対象者、計 1018 人が対象者であった。データは、1988 年から 1996 年までに得られた。決定木 (CART) 分析が、パニック障害の前例の不安障害と不安障害でない障害を調査研究している。CART 分析によると、分離不安障害、社会恐怖、特定の恐怖症 (単一恐怖) が、その後のパニック障害の一義的な予測要因であることが示された。重複不安障害がパニック障害に対する一義的な前例の危険因子であると記載された参照された対象において、これらの結果は、以前に報告された調査結果を、支持し、展開している。

Brereton ら (2006) によると、自閉症は、行動、コミュニケーション、社会的な問題の特定の形態のある神経発達の障害である。付加的な精神健康上の問題が、しばしば不十分な理解となり、検出されない。知的障害の児童に対し、自閉症の若年層の情緒上、行動上の問題の段階と形態を調査研究している。対象者は、4~18 歳の 381 人の自閉症の若年層と知的障害の 581 人

のオーストラリア人の若年層を代表する集団である。親と介護者は、発達行動チェック表を用いて、子どもの情緒上、行動上の問題の詳細を明らかにした。自閉症の若年層は、知的障害の若年層よりも精神病理学のかなり高い段階で苦しんでいることが分かった。

Lindhout ら(2006)は、不安障害の親が、不安障害のない親と、子育てのスタイルにおいて異なるかどうかの調査研究を行っている。6歳から18歳の子どもがいる36人の不安障害の親の臨床的対象者と、36人の正常な統制群とを比較している。子育ては、親の報告と子どもの報告を通して評価している。結果によると、親の見解と子どもの見解から、不安障害の親と不安障害のない統制群の間の子育てのスタイルではかなりの違いが見られた。不安障害の親は、不安障害のない親よりも不十分な保育と厳格な子育てのスタイルを報告している。彼らの子どもは、統制群の子どもよりも多くの拒絶や少ない親の暖かみは報告していなかったが、統制群の親の子どもよりもかなり多くの過保護を報告していた。子どもの報告と同様に親の報告から、調査結果は、不安障害の母と不安障害の父の両方に適用される。

Gladstone ら(2006)によると、いくつかの研究が人生の早い段階での行動上の抑制的気質とその後の臨床的不安の間に観察された関係が報告されたが、早い段階での抑制と不安の間関係はほとんど展開されていない。臨床的対象とされていない成人の横断的調査において、回顧的に報告された児童期の行動上の抑制と人生での抑うつ状態との関係を調べている。社会的不安と児童期の関連するストレス要因の仲介する役割を調査している。特に16歳までの青少年の抑うつ状態が発症しているときには、抑うつ状態の人生のエピソードのある対象者では、かなり多くの児童期の抑制を報告している。一層の分析から、社会的不安は、報告された児童期の抑制とその後の抑うつ状態との関連を媒介することを明らかにし、親の影響の付加的な思索効果を強調している。事実上、早い時期の抑制的気質と、その後の抑うつ状態とのどのような関係も臨床的に重要な社会的不安の存在によるかも知れない。

Reaven と Hepburn(2006)によると、不安障害はその他の発達障害の子どもや通常の発達をしている子どもよりも高い割合で自閉症スペクトラム障害の子どもにおいて起こっている。児童期の不安に関する調査研究は、不安症状を減少させるための治療処置の選択として、認知行動療法を支持している。親の関わりは、これらの子どもの治療処置の結果にも肯定的な効果を与える。自閉症スペクトラム障害の子どもに対する心理社会的介入の効果と不安障害に関する調査研究は希である。不安の治療処置における親の関わりに関する文献の概観をし、自閉症スペクトラム障害と不安症状のある子どもに対する親の関わりを示唆を与えている。

Bagwell ら(2006)は、青年期における児童期の注意欠損多動性障害(ADHD)と、不安障害と気分障害との関連を調査研究している。児童期に ADHD の履歴のある13~18歳の142人の集団と ADHD のない100人の地域社会で募集した青年男女とを比較している。2つの集団は青年期での不安障害と気分障害の割合での違いはなかった。ADHD 群では、青年期での不安障害と気分障害が、内在化した障害の兆候ではなく、児童期の外在化した障害の兆候と社会的問題によって予測される。目下の研究結果からは、児童期に ADHD であった青年男女での不安障害と気

分障害に対する全体的に増加するリスクの証拠はほとんど与えられなかった。児童期の更に重篤な外在化した兆候と社会的問題のある ADHD の子どもは、ある種の内在化した障害に対してリスクが増加するのかも知れない。

Grover ら(2006)によると、治療介入を特定の不安診断と一般的な重複診断に適合させるように、一般的にマニュアル化された治療処置に対する変更の示唆を表している。適切な臨床的適応を表すために、1冊の認知行動療法マニュアル(Cat と Kendall,2000)を利用している。認知行動療法マニュアルの大部分が、例えば、リラクゼーション・トレーニング、認知的再構築、問題解決のような技能とエクスポージャーの要素を含んでいるので、適応に対する提案は関連する技能かエクスポージャーの部分に分類される。推奨される変更には全般性不安障害に対する想像エクスポージャー、分離不安障害の治療処置での親の関わり、社会恐怖に対する現実エクスポージャーでの完了、選択的緘黙の治療処置での教職員の係わりに関する焦点を含んでいる。抑うつ状態と注意欠陥多動障害の一般的な重複兆候に対しての推奨も行っている。

Chitiyo と Wheeler(2006)によると、学校恐怖症は、学齢人口のおよそ 5%に影響している。治療処置がなされなければ、学校恐怖症はこのような状態に挑戦させられた子どもに長期間の破壊的な結末をもたらす。この複雑な行動上の反応について調査するのに、様々な治療処置のアプローチが用いられ、大部分が精神分析的、精神力動的、薬理的、行動的アプローチに置かれることになる。様々な治療介入が、これらのアプローチの派生物として展開したが、これらのアプローチの大部分の使用法についてはまだ論議を呼んでいる。北アメリカに関連する学校恐怖症の現在の研究を探求し、学校恐怖症によって影響された子どもの行動上の支援の必要性を表すための治療処置様式として、積極的行動支援(PBS)の適用に関する研究を広げることが提案している。

Barrett と Pahl(2006)によると、不安障害は児童青年に影響を与えるもっとも一般的な精神健康上の問題の一つである。5人の子どものうちの1人あるいは30人学級の4~6人の生徒は、不安障害を進行させる危険性がある(Boyd ら, 2000)。これらの子どものうち、多くは臨床的治療介入を受けてはいない。学校環境は、この問題を記述し、不安障害の危機を最小にし、進行を防ぐ最適な設定である。選択的、指示的、普遍的アプローチである、学校での予防に対する3つのアプローチの比較可能性と不安のリスクと予防的要因の検証を通して、学校環境での早期の介入と予防の重要性を調査研究している。3つの予防的アプローチが、それぞれの利点と欠点に沿って論じている。予防に対する普遍的アプローチの適応性について、FRIENDS プログラム(Barrett, 2004, 2005)と関連づけ、校内での実行を論じている。FRIENDS プログラムは、子どもと若者のための証拠に基づく認知行動的不安プログラムである。FRIENDS プログラムは、子どもと若者における不安と抑うつ状態の予防と治療のための効果的なプログラムとして世界保健機関(WHO)によって保証された唯一の証拠に基づくプログラムである。

Morgan(2006)によると、事例報告と事例研究から、すべての自閉症患者が不安に苦しんでいるわけではないということは明らかではあるが、かなりの割合が無視することはできない。社

会的な引きこもり，反復性運動，儀式的強制的行動，非定型的注意，認知的機能のような自閉症の行動の症状は，人々が体験する不安の症状でもある。自閉症と不安の間の重複は一層徴候的であり，一方の生理学的基礎の多くが他方にも共有されている。行動と生物学に対するストレスと不安の結果を概観し，適切であるときには，自閉症の行動的生理学的相関物と関連づけることを目指している。自閉症と不安の生物学的行動的特徴の重複の衝撃的程度に疑問を掲げることが意図している。両方の障害に対する共有された病因の可能性に討論と調査研究を引き起こすことを望むものである。これらの課題を取り上げることによって，ストレスと不安の可能性を自閉症の一層問題となる症状のいくつかの元となり引き起こす原因として認識し，可能であるときはいつも，ストレスを軽減するための努力をすることを望むものである。

Muris (2006)によると，不安障害は児童青年のもっとも一般的な精神医学的問題の一つである。過去 20 年の間の児童期の不安障害の発症について蓄積された主な証拠を要約している。遺伝学，行動抑制，うんざりする感受性，否定的な人生の出来事，家族の影響のような様々なリスクと，脆弱的要素と努力を要する統制，認識された統制のような保護的な要素，回避，認知的偏見のような持続的要素が論じられている。発達上の精神病理学見解によって記述され，(a)精神病理学のほとんどの形式が複数の原因の結果であり，(b)精神病理学の起源を理解する上で，成功と失敗の両方の適合が重要であり，(c)精神病理学が，成長する有機体で起こっていると仮定している。

Wood (2006)によると，認知行動的治療介入プログラムの参加に関連して，学校の成績と社会的機能の改善について，時間が経つことによる児童の不安の減少効果を調査研究している。参加者には高い不安のある 6~13 歳の 40 人の子どもが含まれていた。独立した評価者，子ども，親が，子どもの不安を評価し，親が学校の達成度を評価し，子どもと親が社会的機能の評価した。測定は，治療介入前，治療介入中，治療介入後に行われた。固定効果の回帰分析とランダム効果の回帰分析から，減少した不安は治療介入の過程で，改善された学校の達成度と社会的機能を予測させるものであった。これらの調査結果から，不安の影響の変化は子どもの学校及び社会的機能の軌道に影響を及ぼすということが示された。

Marchesi ら (2006)によると，1 年間の薬物療法の前に治療処置の結果に影響を与えるかどうかを確かめるために，パニック障害 (PD) の患者の気質と性格を評価している。71 人のパニック障害の患者が，DSM-IV に対応する構造化された臨床面接 (SCID-IV)，気質性格検査 (TCI)，症状チェック表 (SCL-90)，Hamilton 不安尺度 (Ham-A)，抑うつ状態に対する Hamilton 不安尺度 (Ham-D) によって評価された。患者は薬物療法によって治療され，1 年にわたって毎月評価された。軽減された患者は高い段階の危害回避を示していたが，一方，治療処置の前に軽減されない患者は，危害回避の高い段階 (HA)，固執の低い段階 (P)，自己指示性 (SD)，協同性 (C) を示していた。交絡変数の効果の統制後に，達成する見込みは明確に SD (OR=1.12; P=0.002) に関連した。特に自己承認 SD 得点 (OR=1.30; P=0.02) であった。データによると，パニック障害において，i) Cloninger モデルを用いて，治療処置に対する非反応の一つの予測因子として個性

の病理学的存在を確認し、ii) 低いSD得点の患者では、薬物療法と認知行動療法との組み合わせが最も効果的な治療処置であった。

Paterson(2006)は、成績がこれまで大変良かった学校に行くことを拒否した、健康であった14歳の男子のケースを取り上げている。この子どもの家庭医は緊急の精神医学の照会を行ったという。精神科医は、学校恐怖の診断をし、アナフラニールを処方した。最初の2日後に急速な改善を始め、4日目で完全に回復した。原因となったことに関する問題は依然として残されていた。この患者のことを正分子療法精神医学に関心のある著者の知ることになり、食物アレルギーの過敏さが役割を果たしているかも知れないということが提案された。挑戦的な食物テストを行い、人工着色料の除去を引き続き行った。さらなる学校での問題は全くなかった。学校での達成が十分になされておらず、級友や教師によっていじめられている者において学校恐怖が一般に進行している時には、盲目的に初期の診断を受け入れない重要性が強調されている。

Weersingら(2006)は、青年の抑うつ状態に対する認知行動療法の有効性について研究している。外来抑うつ状態特別クリニック、危機的状態にある十代の若者に対するサービスセンター(STAR)での認知行動療法の治療処置を受けた80人の若者の結果を、"gold standard" 認知行動療法調査研究基準に比較した。平均的に、STARで認知行動療法の治療処置を受けた若者は、認知行動療法基準の若者よりもかなりゆっくりとした症状の改善が見られた。しかし、データセットの間の臨床と広告の照会源の違いを考慮すると、STARの十代の若者に対する結果は、調査研究基準とほぼ同様であった。結果は、臨床的に代表的な地域社会での実践環境と実例の認知行動療法の有効性をテストする一層の努力を支持するものである。

Beidelら(2006)によると、児童に対する社会的有効療法(SET-C)は若者の社会恐怖の治療処置の個別化された生体内のエクスポージャー、社会技術訓練、仲間の一般化体験を組み合わせた包括的な行動療法である。SET-Cは肯定的な治療処置の結果となり、少なくとも3年後まで維持された。治療処置の維持は、3,4,5年後に得られ、自己報告、親の報告、臨床家の評価、直接的な行動評価からなる多面的な評価戦略を用いて調査された。更に、5年前にSET-Cで治療処置された青年男女の総合的機能を、心理学的障害に苦しんでいない一群の青年男女に比較した。すべての治療処置後の利得が5年後にも維持され、SET-C治療処置の応答者の一般的機能は、障害のなかった者とほとんど違いはなかった。データから、SET-Cは社会恐怖に苦しむ若者に対する長期の肯定的効果をもたらすことを示している。

Veenstraら(2006)によると、反社会的行動は否定的な社会体験やこれらの体験の個々の過程によって引き起こされる。オランダの子どもたち2,230人の反社会的行動に関連した気質、認知された子育て、社会経済的状況の間の危機を引き起こす相互作用に焦点を当てている。子どもに対するしつけの記憶のスウェーデン語の頭文字であるEMBU、青年期前期の気質検査改訂版の成人版による努力された統制と欲求不満の気質、親の教育、職業、収入に関する情報による社会経済的状況、親の報告による子ども行動チェック表による反社会的行動、子どもの自己

報告によって、過保護、拒絶、感情的な暖かさのような認知された子育てを評価した。すべての親と気質の要因が、かなり反社会的行動と関連していた。最も強い危機を引き起こす要因は、低水準の努力された統制あるいは高水準の欲求不満の子どもの中での反社会的行動とのみ関連する社会経済的状況に対して見いだされた。反社会的行動との社会経済的状況の関連は、女子よりも男子に対して一層否定的であった。社会経済的状況の効果は、子どもの気質と性別に依存する。

Schneier (2006) は、一般的な臨床上の問題を強調するケースから取り上げている。公式の指針の概観を行い、存在するときには、様々な戦略を支持する証拠が表されている。28歳の男性が、十代前半からの学校、仕事、社会的状況での人々にまつわる感じられた不安と自意識を報告している。質問の時には、内気に見え、仕事の打ち合わせでの話、懇親会への参加、デートの回避を述べていた。社会的に行動的であることを大変望んでいるが、神経質に、当惑しているように思われることを恐れていた。臨床の問題、認知行動療法と薬物療法を含む確立した方法を用いた社会不安障害の診断基準、評価、および治療処置を記述している。

Pettit と Joiner (2006) は、心理学的科学に基づく慢性的抑うつ状態に対する新しい説明の枠組みを展開している。抑うつ状態には、自己維持過程が含まれ、これらの過程は少なくとも部分的には個人間にあり、個人間の見地からのこれらの過程の理解が適応された設定において有効かも知れないという前提に、枠組みは基づいている。臨床的な意味を展開するためにこの枠組みを構築している。抑うつ状態の個人間の過程に関する実証的な調査研究に基づいて記述している。調査研究の基礎に加えて、妥当なものであると信じている思索を取り上げているが、妥当であり、役に立つかどうかに関する判断はその後の心理学的臨床的科学に残される。

Whitton ら (2006) は、全般性不安障害と嘔吐の恐怖という特定の恐怖症と診断された7歳の女子の認知行動療法のケース報告を行っている。展開される履歴は、過剰な心配、広がる不安、胃の不快感の苦情に対して重要である。嘔吐の恐怖は、食事の禁止と体重の損失に結果としてなっていた。治療処置は、気晴らしとリラクソスの不安を減少させる行動技術を教えること、生理的な感覚についての誤った帰属を修正すること、不安を誘発する自己陳述を減少させ、家族関係での身体的徴候の強化を排除することに焦点を当てた。認知行動療法の前後での児童に対する STAI 検査による自己報告で、不安についての臨床的に重要な変化が記録された。終結時には、クライアントは全般性不安障害や特定の恐怖症についての診断基準をもはや満たさなくなった。一連の治療過程では、胃痛の苦情はかなり減少し、クライアントは体重の増加が見られた。5ヶ月の治療処置後の評価から、臨床的な改善が維持されたことが明らかになった。

Kearney (2006a), Tsai (2006), In-Albon ら (2006), Heyne (2006), Vasa (2006), Pini ら (2006) は、school phobia にも関連するが、school refusal において取り上げることとする。

Thomas (2006) によると、児童は学校と家庭での技術を用いる若い生徒を苦しめる現象のサイバーいじめの恐ろしい世界を体験している。サイバーいじめは、コンピュータ、携帯電話、携帯情報端末(PDA)を通して送られた有害で陰悪なメッセージにかかわる。学校のいじめは新し

くはないが、この順列は級友の顔でロッカーのドアを押すか、廊下で攻撃するようなインターネット前の行動よりさらに悪意のあるものである。犠牲者に対する心理学的な結果は破壊的である場合があり、子どもは不安、学校恐怖症、抑うつ状態、低下した自尊心を体験するかもしれない。自殺についても報告されてきている。このような新しい形態のいじめについては同じくらい多くのことが知られているわけではないが、重要な精神的苦痛を創り出す豊富な可能性があるように思われる。

Shirk と Karver (2006)によると、仮定された変化過程、認知行動療法で結果に貢献する治療手続きに焦点を当てている。様々な若者の障害に対する認知行動療法での有効な成分の特定に対する分野を提出することが目的である。治療行動のメカニズムの特定が開業医に、治療処置を蒸留し、洗練し、有効成分への強調を増加し、プロトコルから不要な手続きを削り取らせる。プロセス研究は、効力を高め、治療処置を実際の世界の設定への移行を容易にするかもしれない。

Piacentini ら (2006)は、児童期の強迫性障害の現象学と評価の概観をし、認知行動療法と最も関連する側面を強調している。強迫性障害の認知行動的概念化を表し、児童期の強迫性障害に対する認知行動療法の実行を記述し、これらの若者の治療処置のアプローチの使用を支持する証拠を概観している。

Kendall と Suveg (2006)は、若者の不安障害の身体的、行動的、認知的、情緒に関連する特徴を記述している。不安の正常な発達上の軌道に関して特別な注意を払うことによって、評価についての問題を論じている。家族のストレス、病理学、個々の家族を構成する者のそれぞれの間と親のスタイルの潜在的な影響を認識し、子どもの不安の体験の進行と持続についての家族の役割を展開している。最終的に、認知行動療法の一般的原則と戦略の記述的概観を表し、これらの手続きを評価する最近の研究の結果を提供している。不安のある若者に対する1つの治療処置モデルが詳細に概説され、Temple 大学での児童青年不安障害クリニックで見られたケースの現実のセッションによって例証している。

Hale と Calamari (2006)によると、限定的な研究であり発達上の起源がまだ多くは分かっていないけれども、パニック兆候とパニック障害が若者の重要な臨床上の問題である。児童青年のパニック兆候とパニック障害の病因についてはほとんど知られていないため、研究者はいくつかの過程を調査研究をすることから始めている。不安感度、一般的な不安兆候の恐れとパニック障害に対する認識することができる危険因子が成人では広く研究されてきており、青年と児童において近年研究されてきている。臨床的、非臨床的な人々での調査研究において、不安感度は、パニック兆候とパニック障害と関連してきている。初期の縦断的研究において、不安感度での時間に伴う増加が、若者のパニック兆候を良く予測している。不安感度の発達上の病因はあまり知られていないが、親の行動は関係している。不安感度は、児童青年のパニック障害に対する認識できる危険因子として機能し、一層の研究が保証されるかも知れない。

Cohan ら (2006)によれば、選択性緘黙、例えば家庭でのような他の環境では通常話をするが、

学校のような1つ以上の環境では一貫して話をしない障害の子どもにとって、成功した心理社会的な介入のいくつかの報告があった。過去15年間に刊行された選択性緘黙治療処置の文献の最新の概要と批評を提供するために行われた。科学データベースのPubMed, PsycINFO, Webが、1990年から2005年の間に雑誌において刊行された選択性緘黙治療処置研究を特定するために検索された。合計23件の研究が現在の概観に含まれた。これらの中で、10件は行動、認知行動的アプローチを、1件は行動言語訓練アプローチを、1件は家族システムアプローチを、5件は心理力動アプローチを、6件は選択性緘黙治療処置に対する多様式アプローチを用いていた。これらの文献の多くが方法論的な弱点によって制限されるが、既存の研究は行動、認知行動治療介入を用いることに対する支持を提供している。また、多様式の治療処置は有望に思われるが、これらの治療介入の必須成分はまだ確立されていない。典型的な選択性緘黙の子どもに対する認知行動的治療処置パッケージの輪郭を提供し、概観は今後の調査研究に対する提案で締めくくっている。

van Stratenら(2006)は、第1段階として短期療法あるいは認知行動療法による段階的治療の二つのバージョンの有効性について、気分不安障害の患者に対する伝統的な治療アプローチ(CAU)との比較によって研究を行っている。702人の患者を含む12の設定において、任意の試みが、通常精神健康治療において行われた。患者は、18~24カ月の間に3カ月で一度の割合で面接をされた(69%の回答率)。全体的に見て、患者の健康は時間がたつにつれて、かなり向上した。51%は1年後に、66%は研究の終わりにDSM-IV障害からの回復を実現した。それぞれ、50%と60%は、正常なSCL90とSF36の得点であった。統計的には重要ではないが、認知行動療法と短期療法の患者は、ORが1.26と1.48の間の伝統的な治療アプローチの患者よりも、一層回復が実現した。第1段階として、短期療法や認知行動療法による段階的治療は、これまでの治療と少なくとも同じくらい有効であった。

Leyferら(2006)によると、感情障害と統合失調症に対する子ども尺度(Kiddie-SADS)が、自閉症スペクトラム障害の精神医学的障害の表れを反映する付加的な選別質問とコード化されたオプションを展開することによって自閉症の児童青年で用いるために修正を加えられた。自閉症重複障害面接生活版(ACI-PL)の修正された方法が操作され、頻繁に診断された抑うつ状態、ADHD、強迫性障害の障害の信頼性と妥当性についてのテストを行った。ACI-PLは、臨床的精神医学診断と治療処置の履歴に基づいて有効な信頼できるDSM診断を提供している。対象は、特定の恐怖症、強迫性障害、ADHDの高い広がりを示していた。自閉症における精神医学的障害の割合は高く、機能障害に関連している。

Vociら(2006)によると、社会恐怖は一般的で、非常に重複障害があり、十分に理解されず、相対的に代役とされた状態である。社会恐怖の起源は、他の不安障害の者と共通する家族的生物学的特徴を共有するが、社会恐怖へのありうる道筋として、社会的コミュニケーションの恐怖の前兆が調べられることはほとんどなかった。青年期後期の社会恐怖の前例として早期児童期の言語損傷の役割を研究している。5歳の時に言語損傷があると特定された将来を見越した

縦断的地域研究の参加者と統制群の対象者について、19歳に追跡調査を行った。通常の言語の統制群と比較して、早期の言語損傷の履歴のある者では、19歳までに2.7倍の社会恐怖の可能性があった。結果から、早期の言語損傷は、青年期後期の社会恐怖の明瞭な道筋を表している。

Canadian Journal of Psychiatry (51,2006)では、特定の項目における不安障害の管理に対する臨床的実践の指針を表している。不安障害、広場恐怖を伴うあるいは伴わないパニック障害、特定の恐怖症、社会不安障害、強迫性障害、全般性障害、外傷後ストレス障害、特別の配慮を要する人たちの診断と管理の導入と原理を取り上げている。

Goschら(2006)は、*school phobia*にも関連するが、*school refusal*で取り上げることとする。

Suvegら(2006)は、6人の7歳から13歳の不安を抱えた子どもに対する感情に焦点を当てた認知行動療法の有効性を研究している。すべての関係者には、不安障害面接検査-児童版及び親子版に基づく全般性不安障害、分離不安障害、社会恐怖のような主な不安障害がある。子どものための多面的不安検査(MASC)を用いて、親子は不安の症候学について報告している。感情に関連する能力を評価するために、Kuscheの感情面接改訂版を行い、親子は子どものための感情表現尺度(EESC)と感情調整チェックリスト(ERC)をそれぞれ行った。0, 2週間後、3週間後を起点としてケースは治療処置を始めた。治療処置後に、子どもの大部分は不安の症候学、感情の理解、調整術、全体の機能において改善を示した。不安に加えて、感情に関連する技術での改善は、感情の能力が、子どもの適応社会機能と心理学的適応での重要な要素である。これらの研究結果は、感情に焦点を当てた認知行動療法の最初の支持を与える。

Julienら(2006)は、反芻、衝動恐怖症、洗うこと、チェックすること、正確さ、特定不能の強迫性障害の兆候の下位群における信念の領域の特異性を調査研究することを目的に研究を行っている。126人の強迫性障害関係者が、治療処置前に強迫性障害の信念についての質問紙とパウドラ検査(Padua Inventory)を行った。共分散分析から、不安について統制すると、洗うことに関わる下位群での関係者よりも、思考の重要さと統制に関して、反芻の兆候の下位群の関係者の方が高得点であった。抑うつ状態について統制すると、この差異はかなり重要であった。否定的な気分の状態に統制される回帰分析から、反応と脅威の判断が反芻スコアを予測し、完全主義と確実性はチェックと正確さの得点を予測し、思考の重要さと統制は衝動恐怖症得点を予測した。

Fisakら(2006)によると、選択性緘黙の子どもは特定の社会的状況で話すことを拒否するばかりではなく、しばしば恥ずかしがり、社会的に孤立し、不安であり、行動においても反対に否定的に現れている。選択性緘黙に対する限られた研究によれば、治療介入の可能性を調べる付加的な調査研究が必要である。選択性緘黙と同時に起こる不安の兆候のある10歳の男子のケースを記述している。治療処置には、社会不安のマニュアル化された行動上の治療処置にある子どもに対する社会効果療法(SET-C)のかなり変更した版が含まれている。SET-Cに加えて、治療処置には子どもの不安の管理の際の同時期の親の訓練が含まれた。治療処置選択の原理と治療処置コースの記述をしている。最初の臨床医とクライアントの間の文化的な差異を含む治

療処置の進歩への挑戦に関する議論を行っている。

Cunningham ら (2006) は、次の 3 つの集団の社会恐怖、不安、反抗的行動、社会的技術、自己概念を比較している。一つ目の集団は、教師には話をしないが、家庭や学校で親や級友には話をするかも知れない 28 人の選択性緘黙の子ども、二つ目の集団は家庭での会話に主に限定される全般性緘黙の 30 人の子ども、三つ目は 52 人の地域社会の統制群である。全般性緘黙の子どもは学校での高い不安、家庭での分離不安、強迫性障害、抑うつ状態の兆候を示した。親と教師は、統制群よりも特定群と全般性緘黙群の双方で、社会恐怖と不安の得点が高かったと報告している。特定群と全般性緘黙群の双方で、統制群よりも家庭と学校で言語的非言語的社会的技術の大きな欠損が示された。教師と親は、社会的共同と衝突の解決の非言語的尺度での差異がないと報告し、選択性緘黙が反抗的行動や ADHD のような外在的な問題での増加との関連は見られなかった。比較的広い環境で、特定の緘黙の子どもは話をし、全般性緘黙の子どもよりも教師に対して不安を感じないように見えるが、かなり多くの社会的恐怖の行動と社会的技術の欠損が双方の集団で現れている。

Zvolensky ら (2006) は、パニックスペクトラム精神病理学に対する危機要因研究と予防プログラム展開の間の相互関係を論じている。特にパニックスペクトラム精神病理学、更に一般的な不安障害の予防が、基本的な危機要因研究の活動的系統的置換を通して最も良く進歩すると論じている。主要な用語を取り上げた後、パニックスペクトラム精神病理学に対する手本となる危機要因候補を表し、パニックの問題に対する危機要因としてその役割に関連する研究を要約し、危機要因の用語に対する議論を関連づけている。予防的治療介入の展開に関するパニックスペクトラム精神病理学に対するこれらとこれらの他の潜在的な危機要因に関する推定される実在の知識に対する置換の枠組みを表している。

Ogliari ら (2006) は、児童の不安に関する情緒障害検査質問紙イタリア版 (SCARED) の要因構造を展開し、SCARED で報告された不安の尺度の個々の変化の遺伝的環境的影響の寄与を調査している。イタリアの双子登録から 378 組の 8~17 歳の双子が郵送検査を通して、SCARED を満たしたという。全般性不安障害、パニック障害、社会恐怖、分離不安障害の元々の SCARED の下位尺度と密接に関連する 4 つの個別の経験的な要因が、探索的因子分析から現れた。経験的に導かれた得点は、中度から高度の遺伝率、年齢と性別の差異を除き、全般性不安障害以外のすべての尺度で現れ、年齢の効果が現れた構造式モデルによって分析された。SCARED によって特定された DSM-IV 不安尺度は、イタリアの文化に反映された心理検査構造があり、遺伝的で共有されない環境決定因によって影響を及ぼされる。

Marchesi ら (2006) によると、人格的特徴が薬理的治療処置の結果に影響を与えるかどうかを評価するために、パニック障害の患者の人格を査定している。薬物治療処置の前に、パニック障害を DSM-IV 障害に対する構造化された臨床面接によって診断し、人格を DSM-IV 人格障害に対する構造化された面接により査定した。更にすべての患者を SCL-90, Ham-A と Ham-D により評価した。患者は、任意にパロキセチン (1 日当たり 33.5+/-13.3mg) あるいはシタロプ

ラン(1日当たり 34.7+/-15.2mg)により治療され、1年間1ヶ月毎に追跡調査を行った。3ヶ月の間に、すべてのおよび限定的な症状の攻撃、予期される不安、恐怖症の回避、抑うつ状態がないことが、軽快を確立するのに用いられた。それぞれの兆候の範囲に関する人格的特色の効果が評価された。71人の患者が研究の最後まで関わった。軽快率は、パニック攻撃に対して76%、完全な軽快に対して46%であった。年齢、性別、発症の年齢、パニック障害の期間、基準となるSCL-90パニック不安、Ham-AとHam-D得点、第1軸の重複障害、軽快に関するSIDP特性が論理的回帰分析で分析され、境界線の特性だけがパニック攻撃の軽快に否定的に影響を与えたが(OR=0.69;95%CI=0.49~0.96,p=0.03)、各人格のクラスターの特性の数とSIDPの合計は、治療処置の結果に影響を与えなかった。パニック障害の患者においては、境界線の特性がSSRIの薬物による単一の療法に対する反応に否定的な影響を与え、例えば、心理療法とSSRIの組み合わせのような他の治療処置戦略がこれらの患者の軽快を得る上で必要である。

Johnsonら(2006)によると、社会不安障害及び社会不安は若者においてかなり顕著な心理学的状態である。若者の社会不安のスペクトラムに関連する既知の危機のために、妥当性があり信頼できる評価尺度のある早期の検査が肝要である。自己報告の尺度が児童青年の社会不安に対する最も広く用いられる評価方法である。青年の社会不安障害の自己報告尺度に関する今日までの研究が限られているため、主な対象は、地域社会の青年を対象とした、新しい自己報告尺度、社会不安検査(SPIN)の妥当性と信頼性を検査することによって文献に貢献するものである。SPINは社会不安障害の症候学のすべてのスペクトラムを評価することを意味する17項目の尺度である。成人の人々でのSPINの心理測定的研究が、その妥当性と信頼性を以前に示していた。目下の心理測定的検査において、SPINに対する時間的安定性、内的一致、構造的妥当性に対する強い支持が明らかになり、青年の社会不安障害の評価に対する適切な適格審査尺度であることが示唆された。

RossとCuskelly(2006)によると、典型的に子どもが発達している家族の子どもよりも自閉症スペクトラム障害(ASD)の子どもの兄弟姉妹は多くの問題行動を表し、その関係において多くの困難を体験している。これらの困難に何が原因となるかについてはほとんど知られていない。ASDの子どもの母親が、障害のない兄弟姉妹に関してAchenbachの児童行動チェックリストを行った。兄弟姉妹は、兄弟あるいは姉妹の障害についての知識を検証する質問紙を行った。ASDの兄弟あるいは姉妹とで体験した問題について報告し、これらの出来事への反応で用いた対応戦略を報告した。問題は5つの問題形式の1つに分類された。攻撃的行動は最も一般的に報告される相互作用の問題であり、怒りは普通の反応である。ASDの兄弟あるいは姉妹との困難に直面したときの対応戦略として、兄弟姉妹は一般には自己あるいは他者への非難は選択しなかった。ASDの対応戦略も知識も適応とは関連しなかった。障害のない兄弟姉妹の40%が、境界線あるいは臨床領域に置かれる児童行動チェックリストの得点であった。これらのことから、ASDの子どもの兄弟姉妹は、内的な行動上の進行する問題の増加する危機に置かれている。この結果の原因となる要因は、この段階では分からない。

Layne ら(2006)は、教師の気づきと関連する子どもの不安兆候を決定し、教師の気づきが生徒の年齢と性別に従って異なるかどうかを決定することを目的として研究を行っている。児童のための不安尺度(MASC)を、453人の2年生から5年生の生徒が行い、教師は自分の学級の最も不安のある3人の生徒を指名した。多変量解析が独立変数と同様にMASC尺度得点において行われた。不安があると教師によって特定された子どもは、かなり高い段階の全体的不安、生理学的不安、社会不安、分離不安を示した。全体的に、教師の気づきは生徒の年齢と性別によって異なるものではない。

Himle ら(2006)によると、恐怖と不安の体験は学齢期の児童青年の通常発達の一部であるけれども、精神医学的診断と治療介入が妥当な恐怖と不安が苦悩となり不能とする下位群が存在する。正常な恐怖、適応型の恐怖、臨床上の不安障害の違いを記述し、児童期の不安障害の広がりや影響についての議論を行っている。特に学校環境での不安と恐怖の広がり、発症、機能的障害、臨床的現れに従って、いくつかの重要な児童期の不安障害を個別に説明している。学校環境での治療介入に対する特別の注意により、児童期の不安障害に関する最先端の心理社会的な治療処置の議論を行っている。不安は児童期においては一般的であり、発達上では正常に必要な局面である。発達上で不適當で、長引き、非常に苦悩をさせ、社会的機能、家族的機能、学業上の機能でマイナスの影響がある場合には、不安は適応的であるとは考えられない。親と教職員はしばしば子どもの不安が正常で、児童が成長するかどうか、それとも評価と治療介入を保障する問題であるかどうかを決定する難局に直面する。不安の正常な発生についての議論と障害の本質がしばしば難しい区別であるかもしれないと論じている。記述された治療処置技術は、児童が不安の喚起を管理する上で必要な対処技術を見いだすことを援助するものである。児童は、望ましくなく、役に立たない不安な気持ちを見だし、治療処置において学んだ対処戦略を規定する信号として、これらの身体的感覚を用いる必要な技術を学ぶことになる。教職員は児童と親とが対処に基づく治療介入戦略を遂行するのを援助すると同様に、発達上の不適切で過度の不安を特定し評価する上で重要な役割を果たすことができる。

Stirling ら(2006)によると、感情的な表情に関する注意上の偏見は大人の社会不安に関連している。同様の関係が子どもに存在するかどうか調査している。8歳から11歳の79人が試験的調査検出作業を行った。与えられた試みにおいて、否定的中立的、否定的積極的、積極的中立的である3組の顔の1つが提示された。他のすべてが相関関係が半分以下であることによって、最も強い関係は否定的中立的な試み($r = -0.32$)から、社会不安と否定的な顔からの回避の間であった。この関係は、主として怒りと恐怖の表現の回避のためであった。成人のように子どもにおいても、これらの結果は不安が注意の偏見と関連しているという予備的証拠を提供している。

Verdeli ら(2006)は、school phobiaにも関連するが、school refusalにおいて取り上げる。

4 school refusal に関する文献

2006年のschool refusalをキーワードに持つ文献106件のうち、関連の考えられる29件を取り上げる。国別では、アメリカ合衆国が23件、オーストラリアが2件、ドイツが1件、スイス

が1件、イタリアが1件、イスラエルが1件である。

Carr(2006)は、信頼でき理解できる実践的なアドバイス源を提供するために、この分野での重要な進歩を取り入れた児童青年臨床心理学第2版を表している。実践に対する一般的な概念的枠組みから始め、児童青年との臨床的作業において一般的に遭遇する問題の管理に関する特定のガイダンスを提供し、臨床心理学と家族療法の分野での最良と考える実践を参考に行っている。6つの節で、それぞれの領域の徹底的で包括的な適用範囲を提供している。(a)実践の枠組み、(b)幼児期と児童期初期の問題、(c)中期児童期の問題、(d)青年期の問題、(e)児童虐待、(f)主要な人生の移行の調整である。説明的なケースの実例と同様に、特定の臨床的問題に関わるそれぞれの章には、診断、分類、疫学、臨床的特徴の詳細な議論が含まれる。経験豊富な開業医に対する参考資料、訓練中の臨床心理学者に対する最新の、証拠に基づく実践的マニュアルとして非常に貴重になる。

Kearney(2006a)によると、登校拒否行動は、怠学、学校恐怖症、分離不安のような問題の多いすべての長期欠席のあらゆる部分集合を包含する用語である。もっとも一般的な発症年齢は、10~13歳である。登校拒否行動は、さまざまな兆候、診断、身体的不調、医学的状态の領域に当たっている。縦断的研究によると、名前がつけられない状態であれば、登校拒否行動は、苦悩や、成績低下、級友からの疎外、家族との葛藤、財政的法的な結果などのような重篤な短期的問題を引き起こすことがあるということを示している。登校拒否行動は、時々重篤で、非妥協的であり、多面的な訓練的アプローチが必要である。登校拒否行動のどのような特定のケースを解決するのに、親、医師、メンタル・ヘルスの専門家、教職員の協力とコミュニケーションがしばしば重要である。

Tsai(2006)によると、自閉性障害あるいはアスペルガー障害の人の不安障害を概観し、表される情報が両方に適用することができることを示すのに、自閉症スペクトル障害(ASD)という用語を用いている。自閉性障害とアスペルガー障害の両方の重複行為障害の概観をし、不安障害の医学的査定と一般的な心理社会的治療過程について概説している。ASDの不安障害の心理薬理的査定と治療のためのガイドラインで締めくくっている。

Brucklら(2006)によると、地域社会での対象者における分離不安障害と精神障害との関係を調べ、広場恐怖症のあるなしにかかわらず分離不安が明確にパニック障害に関連するかどうかを評価するために研究を行っている。方法としては、ドイツのミュンヘンの基準として14~24歳の青少年と若い成人を代表する集団の4年間の将来的縦断的研究からデータを得ている。現在の分析は、対象者1,090人の基準調査と2つの追跡調査を行った比較的若い集団の下位サンプルに基づいている。DSM-IV診断は、ミュンヘン統合国際診断(CIDI)を用いて作成された。時間依存の共変量があるコックス回帰分析を、先の分離不安障害がその後続く精神障害に関して増加するリスクに関連しているかどうかを調べるのに用いた。結果として、分離不安障害のDSM-IV基準を満たす関係者が、広場恐怖症(PDAG)(HR=18.1,95%のCI=5.6~58.7)、特定の恐怖症(HR=2.7,95%のCI=1.001~7.6)、全般性不安障害(HR=9.4,95%のCI=1.8~48.7)、強迫神

経症 (HR=10.7,95%の CI=1.7~ 66.1), 双極性障害 (HR=7.7,95%の CI=2.8~20.8), 痛みの障害 (HR=3.5,95%の CI=1.3~9.1), およびアルコール依存 (HR=4.7,95%の CI=1.7~12.4) で, その後のパニック障害を発症するというリスクの増加が見られた。また, 広場恐怖を伴うパニック障害 (HR=4.2,95%の CI=1.4~12.1) に対する増加ハザード率, 双極性障害タイプ II (HR=8.1,95%の CI=2.3~27.4), 痛みの障害 (HR=1.9,95%の CI=1.01~3.5), およびアルコール依存 (HR=2.1,95%の CI=1.1~4) は, 下位閾値の分離不安障害を満たす対象者に関して見いだされた。結論として, 分離不安障害と広場恐怖を伴うパニック障害との強い関連が明らかになったが, 特定の分離不安障害と広場恐怖を伴うパニック障害との関係については反論となっている。広場恐怖を伴うパニック障害は, 特定の結果ではなく, 分離不安障害の完全な媒介変数でもない。

In-Albon ら (2006) によると, 外傷性ストレス障害と強迫神経症の治療処置を除く児童期の不安障害に対する心理療法の有効性を比較している。メタ分析には報告された試みの統合基準である基本的統合基準 (CONSORT) を満たしている。有効サイズ, 回復率のようないくつかの結果変数が, 治療処置後と追跡調査の評価の間, 実行者と intent-to-treat 分析を用いて分析された。2005 年 3 月までに発表された 24 件の研究が, このメタ分析に含まれた。含まれているすべての研究では, 積極的な治療状態は認識行動的であった。治療処置の全体の平均的効果は 0.86 であった。個別の治療処置と集団での治療処置, 児童と家族に焦点を当てた治療処置との間には結果での違いは見いだされなかった。追跡調査のデータから, 治療処置の利得は治療処置後, 数年間持続した。これらの結果から, 児童の不安障害が有効に治療されるという証拠が提供された。集積されたデータは, この点において認知行動療法の臨床的有効性を支持している。認知行動療法以外の治療処置を調査研究する任意の統制的試行研究については欠けている。

Heyne (2006) によると, ほとんどの児童と青年男女が何の困難もなく定期的に登校している一方で, 登校問題と見なすことのできることを体験しているかなりの集団の若年層が存在する。問題のない長期欠席と問題のある長期欠席の違いを提案し, 問題のある長期欠席の若者は少なくとも 2 週間のうち, (a) 例えば 50%以上の学校での時間を損失し, (b) 子どもや家族の日常生活の流れに重要な干渉が起こるような少なくとも 2 週間の間に登校する上での困難さを体験するものと定義している (Kearney, 2003)。更に (a) に関しては, 欠席は病気や家庭教育に対する手配のような親と教職員が妥当であると見なしているような要素によるものではない。日常生活の重要な干渉のような特定されない基準も含んでいるが, 登校問題の重要な分野に対する多くの必要な合意をもたらすことにつながる。

Hwang ら (2006) は, 中国系アメリカ人の認知行動療法をどのように行うかについて論じている。中国文化が中国人の移民に対する認知行動療法に潜在的にどのように影響を与えているのかを精神健康の実践を行っている者が理解できるように理論, 調査研究, 臨床実践の統合をしようとしている。中国系アメリカ人の患者の治療上の必要性をより一層満たすように, 認知行動療法を適応し修正している。認知行動療法の文化的修正がどのように中国系アメリカ人の患者に対して有効な心理療法の結果に導くかを, 事例研究により示している。

Vasa と Pine(2006)によると、不安障害は、心理学的、学業的、社会的機能を妨げる過度の発達上の不適当な不安によって特徴づけられる。児童期の不安障害は、登校拒否、身体的苦情、社会的引きこもり、回避行動、低い自尊心をもたらす。これらの不利な結果にもかかわらず、多くの子どもを治療しないまま、これらの状態は、しばしば無視されるか、誤診されている。児童期の不安障害の研究は、これらの状態に関する多くの重要な臨床的特徴を明らかにするデータを急速に蓄積している。不安障害は児童と青年男女を苦しめる最も一般的な行為障害であり、しばしば、これらの障害は児童期のうつ状態と破壊的な行動障害と重複している。不安障害は多くの児童では一時的である。児童のある者は、成人の不安、うつ状態、薬物乱用、自殺未遂につながる慢性的な変動するコースに直面することになる。治療処置の研究から、かなりの数の影響を受けている児童が残される一方で、児童の 50%以上に、薬物療法と認知行動療法が効果的であることが示されている。病態生理学の研究から、より効果的な治療処置を育む重要な洞察が明らかにされるかもしれない。分離不安障害、全般性不安障害、社会恐怖という 3 つの一般的な障害の病態生理学に関するデータを提示している。これらの障害は、同様の臨床的特徴と治療処置に対する反応が共有されるため、一緒に分類される。

Shirk と Karver(2006)は、school refusal にも関連するが、school phobia で取り上げる。

Pini ら(2006)は、双極性 I 型障害の診断を受けた成人の患者の社会不安障害の頻度、臨床的相関、発症時の関係を調査研究している。対象者は、DSM-III-R の患者に対する構造化された臨床面接によって診断が評価された 189 人の患者であった。12.7%に当たる 24 人の患者が生涯の社会不安障害に対する DSM-III-R の診断基準を満たしており、これらのうち、全体の 10.1%に当たる 19 人が最終月でも社会不安障害であった。社会不安障害と重複する双極性障害のかなり多くの患者が、そうでない者と比較すると、薬物乱用障害でもあった。Hopkins 症状チェックリスト(HSCL-90)では、個人間の感受性、強迫観念、恐怖症性不安、妄想的観念のレベルが社会不安障害のある双極性障害の患者の方が高かった。重複の社会不安障害の双極性障害患者は、そうでない者より、児童期に、頻繁に分離不安の問題(登校拒否)を再起させていた。生涯の社会不安障害の重複は、症候群の双極性障害の発症が比較的若年であることと関連していた。強迫性障害が先に存在する場合は、双極性障害の発症を遅らせる傾向があった。結論として、社会不安障害の重複は、双極性障害の患者の中ではまれではなく、双極性障害の発症の年齢と現象論に影響を与えるかも知れない。これらの研究結果は、治療処置計画と社会不安障害と双極性障害との機能分子的关系を見いだす可能性に影響を及ぼすかも知れない。

Mueller ら(2006)は、school refusal にも関連するが、school dropouts で取り上げる。

Hofflich ら(2006)は、school refusal にも関連するが、school phobia で取り上げる。

Corsano ら(2006)によると、心理学的幸福と青年期の不快感に関する親と友人との関係と孤独の影響を調査研究している。11~19 歳の 330 人のイタリア人の青年男女の対象者による 2 つのアンケート調査(LLCA 及び TRI)からデータを収集している。仮説を立てたように、結果によれば、友人と親との積極的な関係が青年男女の心理学的幸福を促進し、不快感が減少した。

研究から青年男女は、孤独の様々な状態で識別される。年齢と性別によって、孤独と社会拒否の痛みを認識する一方で、孤独の快い次元を認識するかも知れない。孤独が社会拒否で引き起こされるのであれば、孤独が青年男女の幸福に対するリスクであるかもしれないが、愛着に対する必要性に対する発達上の必要性であることもあり、青年男女が一人であることを選ぶ時には、心理学的幸福を促進することもあり得る。

Brereton ら(2006)は、school refusal にも関連するが、school phobia で取り上げる。

Gosch ら(2006)は、社会恐怖、全般性不安障害、分離不安障害に焦点を当てて、児童の不安障害の治療処置に適用されるように、認知行動療法の理論上の基礎を解明しようとしている。このアプローチに影響を及ぼしている行動理論と認知理論を概観している。効果的で、臨床的に敏感で、子どもに焦点を当てた治療処置を提供するためには、これらの理論に関するこのアプローチの本質的な要素を理解する必要がある。論じられている要素には、評価、心理教育、感情教育、自己教育訓練、認知的再構成、問題解決、リラクゼーション訓練、モデル化、危機管理、エクスポージャー手順が含まれている。治療処置での経験上の必要性のような仮定された鍵となる過程を考察で述べている。

Kearney(2006b)によると、登校拒否評価尺度改訂版(SRAS-R)は、若者の登校拒否行動の4つの機能的条件の相対的強さを評価するために立案された手段である。先行研究では十分な信頼性を表すための尺度の児童と親の版を示していたけれども、SRAS-Rの因子構造の検証が依然として必要であった。今回の研究では、SRAS-Rの児童と親の版(SRAS-R-CとSRAS-R-P)の管理を検証的因子分析を用いて行っている。二つの尺度に対して、2つのSRAS-R-Cと3つのSRAS-R-Pの項目の差し替えにより、4つの因子モデルが支持された。それぞれのSRAS-Rの版に対して、3つの因子モデルと2つの因子モデルが支持されなかった。SRAS-Rの使用に対するこれらの結果の展開を論じている。

Gadow ら(2006)によると、病院外来の広汎性発達障害児(PDD)と非広汎性発達障害児(nonPDD)と、3~5歳と6~12歳の多数の対象者の中のDSM-IV診断基準のADHD下位群とを比較している。DSM-IVに関わる評価尺度を親と教師が行った。ADHDの下位群は非ADHD群とは明らかに識別され、PDDとnonPDD対象者で類似の、親の定義の下位群よりも教師の定義の下位群であり若年の子どもよりも年上の子どもで顕著な併発して起こる精神医学的兆候の特異な形態が見られた。複合型は、不注意型よりも更に反抗的で攻撃的なPDD兆候があり、他の下位群よりも不利な状況に置かれた家庭の出身であった。多動・衝動型はあまり損傷を受けていなかった。研究結果から、ADHDはPDDの児童の臨床的に重要な症候群であるかも知れないという調査結果を支持するものである。

Garrison(2006)によると、Delaware州のWilmingtonで行われた3年間の怠学減少プログラムのデータを用いて、初等学校から中等学校、中等学校から高等学校の学年の切り換え点での怠学と怠学の理由の関係を評価している。データから、5年生から6年生の間に怠学者の数が95%増加し、8年生から9年生の間には76%増加した。10歳から11歳の間には怠学者が87%、13

歳から 14 歳の間には 68%が増加した。様々な人口統計学的変数による怠学の分析を行い、二つの鍵となる学年、5 年生と 8 年生の切り換えの学年に焦点を当てることにより怠学をいかに減少させることができるかに関する政策提案を行っている。

Patchin ら(2006)によると、学校環境でのいじめが、近年増加する学問的な配慮を受けた重要な社会的関心事である。特に、その原因と影響は社会科学と行動科学の多くの研究者によって研究されてきている。いじめの新しい変換が最近起こり、より一般的になってきている。科学技術に敏感な学生はサイバースペースに向かい級友を悩ませている。犠牲者と先導者の双方に振りかかりうるいじめの本質と電子世界への変質、否定的な影響を論じている。オンラインによるいじめの本質と範囲を経験的に評価するように立案されたパイロット研究から、研究結果を報告している。全体的な目的は、コミュニケーションとコンピュータの交差点に由来する新しい形式の逸脱を取り上げ、将来的に実証的研究を行うことができるかどうかに関する基礎的な背景を提供しようとしている。

Verdeli ら(2006)によると、小児科の不安とうつ状態に対する任意の臨床試験に関する文献を概観し、アメリカ心理学会による基準を用いて、特性を評価しようとした。医学的、心理学的文献での任意の統制された臨床試験を含んでいる。調査研究の証拠から、認知行動療法が児童のうつ状態に対する効果的な治療処置であるかも知れない。独立して取られた抑うつ状態にある青年男女に対する認知行動療法のプロトコルのいずれも十分に確立された治療処置の基準を満たさないが、様々なプロトコルが集合としてみなされるなら、認知行動療法は十分に確立された治療処置の基準を満たしている。青年男女の抑うつ状態に対する個人間の心理療法(IPT-A)は、青年期の抑うつ状態に関する安定した治療処置である。認知行動療法は、多くの児童青年の不安障害に関する最良と考える確立された治療処置である。経験に基づく治療処置に対するサポートと同様に、抑うつ状態と不安に対する心理療法の治療介入の臨床試験の数の増加がある一方で、これらの研究の範囲は依然として限界があり、さまざまな地域社会の環境に対するこれらの治療処置の移行性を調査研究する必要がある。

Goldstein と Fornari(2006)は、児童青年の分離不安を概観している。登校拒否と分離不安の差異を評価し、衰弱させる問題の本質を認識し、発達に関わる生物学的心理学的心理社会的影響を特定する治療処置の特定のプログラムを記述している。分離不安の本質と進行、患者の評価、対応術を子どもに教えること、対応術を親に教えること、分離不安に立ち向かうこと、落とし穴を管理することという 6 つの区分に分けている。治療処置の間に用いる評価尺度と折り込みによる付録が含まれる。分離不安を評価し、治療処置を行う組織的アプローチに有効である。精神科医は、認知行動的な技術の概観から利益を得られるが、情報源を当てにすべきではない。

McLoone ら(2006)によると、不安障害はもっとも一般的な児童期の心理学的障害の一つである。子ども、親、教職員への急激な苦悩を引き起こすことに加え、不安障害は、子どもの教育的社会的発達に重要な影響を与え、成人期まで持続するかも知れない。最近の研究では、児童

の不安障害の治療処置と予防の重要な環境として、学校を認識し始めている。いくつかの一般的な不安障害と学校環境での現れを始めに記述している。評価の様々な方法を提供する利点と限界と同様に、特に子どもの不安の評価に対して立案されたより一般的な評価手段のいくつかを取り上げている。Cool Kids, Friends, Skills for Social and Academic Success (SASS)の3つの学校を基盤とする治療処置プログラムを概観している。Cool Kids と Friends はともに不安障害の治療処置として広く適したものであるが、SASS は特に社会恐怖に対して立案されたプログラムの事例として概観に含めている。

Fenstermacher ら(2006)によると、注意欠損多動性障害の児童は、生活技能の欠損を含む様々な重複状況に対する重要なリスクがある。これらの子どもの社会的困難の様々な面にかかわる治療介入が展開されるが、新しい技術を既存の生活技能治療介入の文献と統合したり、そのような経験的なアプローチを調査研究していることはほとんどなかった。ADHD と診断された子どもに対するコンピュータで修正された生活技能訓練プログラムの有効性を調査することを目的として研究を行っている。プログラムは、ADHD の4人の子どもに対して、ビデオの仲間のモデル化、社会的問題解決、強化要素によるさまざまなコンピュータで促進された形式で特定の社会技能系列が示された。行動上のアナログ環境で有効な特定の社会的問題解決技能を示す参加者の能力が評価された。参加者への多面的な基準デザイン(MBD)の複数の徹底的な調査変化を用いている。すべての参加者で、活動的な仲間とのアナログのロール・プレイ評価での有効な社会的問題解決技能を示す能力における改善が見られた。3週間と6週間の間隔での追跡調査データによれば、参加者が時間がたつにつれて、利得を維持したことが示された。

Hodge ら(2006)は、情緒行動障害(EBD)の生徒の数学における教育的介入に関する先行研究から研究結果を統合している。1985年から2005年12月までの体系的検索から、内包する基準を満たす13件の研究が見いだされた。(a)整数、小数、分数の足し算、引き算、掛け算、わり算などの基本的技能を対象とした先行研究において調べられた数学の介入。(b)生徒向けの戦略、教師向けの教授、仲間による個人教授、コンピュータ支援学習を含む研究で調べられた介入。(c)EBDの生徒に対する数学の問題解決における教育的介入を調べている研究はほとんど実在しなかった。この概観に基づく実践の意味は、様々な介入に連なる研究がわずかであることで制限される。概観による調査結果は、EBDの生徒に対する数学介入の系統的な調査研究の必要性を強調している。

Forness ら(2006)によると、多くの心理的薬理的治療処置と行動的治療介入、または、認知行動的治療介入が証拠に基づく実践として確立されてきていたが、情緒行動障害(EBD)の子どもでの結果に関して、直接互いにはほとんど比較されてはいない。そのような直接比較を行った6件の最近のランダム化された臨床試験からの調査結果を提示している。3件は、注意欠損多動性障害(ADHD)の児童とかかわり、3件はうつ病性障害か不安障害の児童青年にかかわったものである。研究結果は、併用した治療処置がおそらく最も効果を生じているが、心理的薬理的治療処置が少なくとも6件のトライアルのうち5件における行動治療介入あるいは認

知行動治療介入よりも幾分か効果的であるかもしれないことを示唆している。特別支援教育の証拠に基づく実践の追求に関して、これらの結果が論じられている。

Chitiyo と Wheeler (2006) は、school refusal にも関連するが、school phobia において取り上げることとする。

Aviv (2006) によると、登校拒否の治療処置での催眠の使用を記載している研究はほとんどない。これらの研究ではストレスの多い朝の時間での自己催眠の問題にはアプローチしていない。患者は自宅にいるか学校に行く途中で、セラピストはオフィスにおり、知られている催眠の技術を用いるが、電話によりリハーサルを行うという治療的アプローチを紹介している。12 人の登校拒否の青年に対して、様々な催眠療法技術で治療処置がなされた。携帯電話とセラピストの有用性を備えており、不安が起こったとき、これらの青年は代替の対処戦略として催眠の利得があった。結果によると、参加者のうちの 8 人がフルタイムの登校を維持し、3 人は部分的な改善をし、1 人は登校状況を改善しなかった。不安が起こるとき、不安に立ち向かうことができるように患者がセラピストとの接続を維持するのを可能にしている間に、登校拒否の治療処置での自己催眠の利得を例証している。

Massat ら (2006) によると、学校で一般に表される精神健康に関わる学校でのソーシャルワークの最良と考える実践に影響を与える傾向と挑戦を取り上げている。生徒の必要とサービスのモデルを展開し、恥辱を減少させる上での新しい強調を記述している。測定に対する増加する強調、学校での診断と統計マニュアル (DSM-IV-TR) の使用、精神健康治療介入に対する証拠ベースについて論じている。記述された特定の障害は、注意欠損多動性障害、行為障害、気分障害、不安障害である。

Kendall ら (2006) によると、青年期とは、前世紀では調査にふさわしい別々の発達上の段階と見なされるだけであった児童期から成人期の交差点である。この発達上の期間は、かなりの感情の激しい動揺と混乱の時間として歴史的に知覚されてきたが、青年期に特定の精神病理学の発達と維持の研究はわずかである。青年期に関して行われた研究は、大体においてこの期間の標準の発達上の小道に焦点を合わせている。それにもかかわらず、青年期における精神病理学の本質に関する何らかの知識を獲得したが、この領域の文献は、外在化する行動に大いに焦点を当てている。最近まで、内在化された問題は、かなり見落とされてきている。精神病理学のこの広い領域の研究は、発達心理学の分野において、最近注意を向けられているが、青年期の特定の内面化された障害の本質に関する臨床心理学における調査研究は十分にはなされていない。特に、不安障害の青年のことになると、巨大な知識の差に直面することになる。ここでは青年の不安障害について論じ、病因、評価、治療処置、防止に焦点を合わせている。

III おわりに

2006 年の PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS における不登校に関連すると考えられる研究では、単行本の形で出版され、その中での章が文献として取り上げられているものがいくつか見られ

ることがここ 2, 3 年の特徴としてあげられる。また、特別支援教育で取り上げられている障害に関わる文献が増加してきている。不安障害、社会恐怖、行為障害などに関する文献が多く見られているが、これらの重複障害についても取り上げられていることも近年の特徴である。

インターネットでの掲載が容易になり、引用文献、参考文献をあわせて掲載する文献が多くなっている。文献を電子データとして保存をすることが普通となったこともあり、それぞれのキーワードに関わる文献数が著しく増加したことも特徴である。

2006 年の DIALOG データベースでの PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS では、school attendance に関する文献が 314 件、school dropouts に関する文献が 179 件、school phobia に関する文献が 207 件、school refusal に関する文献は 106 件であった。2006 年の検索文献総数は 806 件であり、このうち 124 件について取り上げた。検索文献件数は、1997 年 101 件、1998 年 95 件、1999 年 118 件、2000 年 166 件、2001 年 289 件、2002 年 280 件、2003 年 371 件、2004 年 833 件、2005 年 935 件であり、文献数としては 800~900 件前後を推移している。直接的な関連がない文献は誌面の関係で取り上げていないが、各キーワード毎の経年変化については、そろそろまとめなければならないと考えている。増減については今後も注目しておきたい。

基礎研究としての ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献を用いた世界の不登校に関する研究の 1 年毎の概観は、16 年目となる。2002 年まで進めてきた ERIC の年毎の概観が、検索形態が変更されたためできなくなったことは残念であるが、PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の年毎の検索が可能であるので、基礎研究を継続する。日本における登校に関連する問題、不登校に関連する問題は解決してきているとは考えられず、今後も 2000 年代の 1 年毎の概観のアプローチをしていく必要があると考える。

文献

- Al-Haggag, Mohammad S. et al. : Biofeedback and cognitive behavioral therapy for Egyptian adolescents suffering from chronic fatigue syndrome., *Journal of Pediatric Neurology*, **4**(3), 161-169, 2006.
- Aviv, Alex : Tele-hypnosis in the Treatment of Adolescent School Refusal., *American Journal of Clinical Hypnosis*, **49**(1), 31-40, Jul, 2006.
- Bagwell, Catherine L. et al. : Anxiety and Mood Disorders in Adolescents With Childhood Attention-Deficit/Hyperactivity Disorder., *Journal of Emotional and Behavioral Disorders*, **14**(3), 178-187, Fal, 2006.
- Barrett, Paula M.; Pahl, Kristine M. : School-Based Intervention: Examining a Universal Approach to Anxiety Management ., *Australian Journal of Guidance & Counselling*, **16**(1), 55-75, Jul, 2006.
- Beidel, Deborah C. et al. : Social Effectiveness Therapy for Children: Five Years Later., *Behavior Therapy*, **37**(4), 416-425, Dec, 2006.

- Biederman, Joseph et al. : Antecedents to Panic Disorder in Nonreferred Adults., *Journal of Clinical Psychiatry* ,**67**(8) , 1179-1186, Aug , 2006.
- Blume, Thomas W. : *Becoming a family counselor: A bridge to family therapy theory and practice.*,xv , 415 , 2006.
- Booker, Keonya C. : School Belonging and the African American Adolescent: What do We Know and Where Should We Go?,*The High School Journal* , **89**(4) , 1-7 , Apr-May , 2006.
- Brereton, Avril V.et al : Psychopathology in Children and Adolescents with Autism Compared to Young People with Intellectual Disability.,*Journal of Autism and Developmental Disorders*, **36**(7) , 863-870, Oct, 2006.
- Brown, Christia Spears : Bias at school: Perceptions of racial/ethnic discrimination among Latino and European American children.,*Cognitive Development* , **21**(4) , 401-419, Oct-Dec , 2006.
- Bruckl, Tanja M. et al. : Childhood Separation Anxiety and the Risk of Subsequent Psychopathology: Results from a Community Study.,*Psychotherapy and Psychosomatics*, **76**(1) , 47-56, Dec, 2006.
- Carr, Alan : *The handbook of child and adolescent clinical psychology: A contextual approach* (2nd ed.) ,xxix , 1190 , 2006.
- Clinical Practice Guidelines: Management of Anxiety Disorders.*, *Canadian Journal of Psychiatry* , **51**(8,Suppl2) , 7S-90S , Jul , 2006.
- Chitiyo, Morgan ; Wheeler, John J. : School phobia: Understanding a complex behavioural response., *Journal of Research in Special Educational Needs* , **6**(2) , 87-91, May , 2006.
- Cohan, Sharon L.et al. : Practitioner Review: Psychosocial interventions for children with selective mutism: a critical evaluation of the literature from 1990-2005.,*Journal of Child Psychology and Psychiatry* , **47**(11) , 1085-1097 , Nov , 2006.
- Corsano, Paola et al. : Psychological well-being in adolescence: the contribution of interpersonal relations and experience of being alone., *Adolescence* , **41**(162) , 341-353, Sum , 2006.
- Cunningham, Charles E. et al. : Social phobia, anxiety, oppositional behavior, social skills, and self-concept in children with specific selective mutism, generalized selective mutism, and community controls.,*European Child & Adolescent Psychiatry* ,**15**(5) , 245-255 , Aug , 2006.
- Danielson, Carla Kmett et al. : Identification of High-Risk Behaviors Among Victimized Adolescents and Implications for Empirically Supported Psychosocial Treatment.,*Journal of Psychiatric Practice* , **12**(6) , 364-383 , Nov , 2006.
- Daniel, Stephanie S.et al. : Suicidality, School Dropout, and Reading Problems Among Adolescents., *Journal of Learning Disabilities* , **39**(6) , 507-514, Nov-Dec , 2006.
- Davis, James Earl : Research at the margin: Mapping masculinity and mobility of African-American high school dropouts.,*International Journal of Qualitative Studies in*

- Education , **19**(3) , 289-304 , May-Jun , 2006.
- de Barona, Maryann Santos et al. : School Counselors and School Psychologists: Collaborating to Ensure Minority Students Receive Appropriate Consideration for Special Educational Programs., *Professional School Counseling* , **10**(1) , 3-13 , Oct , 2006.
- Erickson, Cecelia DuPlessis et al. : The Healthy Learner Model for Student Chronic Condition Management--Part I., *Journal of School Nursing* , **22**(6) , 310-318, Dec , 2006.
- Fenstermacher, Kevin et al. : Effectiveness of a computer-facilitated interactive social skills training program for boys with attention deficit hyperactivity disorder., *School Psychology Quarterly* , **21**(2) , 197-224 , Sum , 2006.
- Fisak, Brian J. Jr.et al. : Assessment and Behavioral Treatment of Selective Mutism.,*Clinical Case Studies* , **5**(5) , 382-402 , Oct , 2006.
- Forness, Steven R.et al. : Recent Randomized Clinical Trials Comparing Behavioral Interventions and Psychopharmacologic Treatments for Students With EBD., *Behavioral Disorders* , **31**(3) , 284-296 , May , 2006.
- Gadow, Kenneth D.et al. : ADHD Symptom Subtypes in Children with Pervasive Developmental Disorder., *Journal of Autism and Developmental Disorders* , **36**(2) , 271-283 , Feb , 2006.
- Garrison, Arthur H. : "I Missed the Bus": School Grade Transition, the Wilmington Truancy Center, and Reasons Youth Don't Go to School., *Youth Violence and Juvenile Justice* , **4**(2) , 204-212, Apr , 2006.
- Giallo, R. et al. : Child, parent and family factors as predictors of adjustment for siblings of children with a disability.,*Journal of Intellectual Disability Research* , **50**(12) , 937-948, Dec, 2006.
- Gladstone, Gemma L. et al. : Is behavioral inhibition a risk factor for depression? .,*Journal of Affective Disorders* , **95**(1-3) , 85-94, Oct, 2006.
- Goldstein, Jennie; Fornari, Victor : Separation Anxiety in Children and Adolescents: An Individualized Approach to Assessment and Treatment.,*Journal of Child and Adolescent Psychopharmacology* , **16**(3) , 375-376, Jun, 2006.
- Gosch, Elizabeth A.et al. : Principles of Cognitive-Behavioral Therapy for Anxiety Disorders in Children., *Journal of Cognitive Psychotherapy* , **20**(3) , 247-262 , Fal , 2006.
- Graeff-Martins, Ana Soledade et al. : A package of interventions to reduce school dropout in public schools in a developing country: A feasibility study., *European Child & Adolescent Psychiatry* , **15**(8) , 442-449 , Dec , 2006.
- Griner, Derek; Smith, Timothy B. : Culturally Adapted Mental Health Intervention: A Meta-Analytic Review.,*Psychotherapy: Theory, Research, Practice, Training* ,**43**(4) , 531-548, Win , 2006.

- Grover, Rachel L. et al. : Treatment Modifications Based on Childhood Anxiety Diagnosis: Demonstrating the Flexibility in Manualized Treatment., *Journal of Cognitive Psychotherapy*, **20** (3), 275-286, Fal, 2006.
- Hadwin, Julie A. et al. : The development of information processing biases in childhood anxiety: A review and exploration of its origins in parenting., *Clinical Psychology Review*, **26** (7), 876-894, Nov, 2006.
- Hale, Lisa R.; Calamari, John E. : Panic Symptoms and Disorder in Youth: What Role Does Anxiety Sensitivity Play?, Velonis, Calvin M. (Ed) ., *New developments in anxiety disorders research.*, 131-162, x, 230, 2006.
- Heyne, David : School Refusal., Fisher, Jane E. et al. (Ed) , *Practitioner's guide to evidence-based psychotherapy.*, 600-619, vi, 754, 2006.
- Higa, Charmaine K. et al. : Parental Assessment of Childhood Social Phobia: Psychometric Properties of the Social Phobia and Anxiety Inventory for Children--Parent Report., *Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology*, **35** (4), 590-597, 2006.
- Himle, Joseph A. et al. : Childhood Anxiety Disorders., Waller, Raymond J. (Ed) ., *Fostering child & adolescent mental health in the classroom.*, 77-98, xi, 339, 2006.
- Hodge, Janie et al. : A Review of Instructional Interventions in Mathematics for Students With Emotional and Behavioral Disorders., *Behavioral Disorders*, **31** (3), 297-311, May, 2006.
- Hofflich, Stacey A. et al : Somatic complaints and childhood anxiety disorders., *International Journal of Clinical and Health Psychology*, **6** (2), 229-242, May, 2006.
- Hwang, Wei-Chin et al. : Cognitive-Behavioral Therapy With Chinese Americans: Research, Theory, and Clinical Practice., *Cognitive and Behavioral Practice*, **13** (4), 293-303, Nov, 2006.
- In-Albon, Tina et al. : Psychotherapy of Childhood Anxiety Disorders: A Meta-Analysis., *Psychotherapy and Psychosomatics*, **76** (1), 15-24, Dec, 2006.
- Johnson, Helena S. et al. : The Social Phobia Inventory: Validity and reliability in an adolescent community sample., *Psychological Assessment*, **18** (3), 269-277, Sep, 2006.
- Jonker, Ellis F. : School hurts: Refrains of hurt and hopelessness in stories about dropping out at a vocational school for care work., *Journal of Education and Work*, **19** (2), 121-140, Apr, 2006.
- Julien, Dominic et al. : The specificity of belief domains in obsessive-compulsive symptom subtypes., *Personality and Individual Differences*, **41** (7), 1205-1216, Nov, 2006.
- Kearney, Christopher A. : Dealing with school refusal behavior: A primer for family physicians: Workable solutions for unhappy youth and frustrated parents., *The Journal of Family Practice*, **55** (8), 685-692, Aug, 2006.

- Kearney, Christopher A. : Confirmatory Factor Analysis of the School Refusal Assessment Scale-Revised: Child and Parent Versions., *Journal of Psychopathology and Behavioral Assessment* , **28**(3) , 139-144 , Sep , 2006.
- Kemp, Suzanne E. : Dropout policies and trends for students with and without disabilities., *Adolescence* , **41** (162) , 235-250 , Sum , 2006.
- Kendall, Philip C.; Suveg, Cynthia : Treating Anxiety Disorders in Youth., Kendall, Philip C. (Ed) ., *Child and adolescent therapy: Cognitive-behavioral procedures* (3rd ed.) ., 243-294 , xvi, 528 , 2006.
- Kendall, Philip C. et al. : Anxiety Disorders., Wolfe, David A. et al. (Ed) , *Behavioral and emotional disorders in adolescents: Nature, assessment, and treatment.*, 259-299, xvi, 719, 2006.
- Klingner, Janette et al. : English Language Learners Struggling to Learn to Read: Emergent Scholarship on Linguistic Differences and Learning Disabilities., *Journal of Learning Disabilities*, **39**(5) , 386-389, Sep-Oct , 2006.
- Konstantopoulos, Spyros : Trends of School Effects on Student Achievement: Evidence from NLS:72, HSB:82, and NELS:92., *Teachers College Record* , **108** (12) , 2550-2581 , Dec , 2006.
- Kuhn, Jennifer C. et al. : Maternal Self-Efficacy and Associated Parenting Cognitions Among Mothers of Children With Autism., *American Journal of Orthopsychiatry*, **76**(4) , 564-575, Oct, 2006.
- Lam, Lawrence T. et al. : Attention deficit and hyperactivity disorder tendency and unintentional injury among adolescents in China., *Accident Analysis & Prevention* , **38**(6) , 1176-1182, Nov, 2006.
- Layne, Ann E. et al. : Teacher Awareness of Anxiety Symptoms in Children., *Child Psychiatry & Human Development* , **36**(4) , 383-392 , Jun , 2006.
- Leyfer, Ovsanna T. et al. : Comorbid Psychiatric Disorders in Children with Autism: Interview Development and Rates of Disorders., *Journal of Autism and Developmental Disorders* , **36**(7) , 849-861 , Oct , 2006.
- Lindhout, Ingeborg et al. : Childrearing Style of Anxiety-Disordered Parents., *Child Psychiatry & Human Development* , **37**(1) , 89-102, Spr , 2006.
- Lubbers, Miranda J. et al. : The impact of peer relations on academic progress in junior high., *Journal of School Psychology* , **44**(6) , 491-512 , Dec , 2006.
- Magnuson, Katherine A.; Duncan, Greg J. : The role of family socioeconomic resources in the black-white test score gap among young children., *Developmental Review* , **26**(4) , 365-399, Dec , 2006.
- Marchesi, C. et al. : The effect of temperament and character on response to selective serotonin reuptake inhibitors in panic disorder., *Acta Psychiatrica Scandinavica* , **114**(3) , 203-210, Sep,

2006.

- Marchesi, Carlo et al. : Personality disorders and response to medication treatment in panic disorder: A 1-year naturalistic study.,*Progress in Neuro-Psychopharmacology & Biological Psychiatry* , **30**(7), 1240-1245 , Sep , 2006.
- Massat, Carol Rippey et al. : School Social Work in the Twenty-First Century: Current Trends and Challenges in Best Practice with Mental Health Issues.,*School Social Work Journal* , **31**(SpecIss), 94-115, Sum , 2006.
- Matos, Margarida G.et al. : Family-Related School Issues and the Mental Health of Adolescents: Post Hoc Analyses of the Portuguese National Health Behaviour in School-Aged Children Survey Data.,*Journal of Family Studies* , **12**(2), 261-275 , Nov , 2006.
- Matthews, Michael S. : Gifted Students Dropping Out: Recent Findings from a Southeastern State.,*Roeper Review* , **28**(4), 216-223 , Sum , 2006.
- McLoone, Jordana et al. : Treating Anxiety Disorders in a School Setting., *Education & Treatment of Children* , **29**(2), 219-242 , May , 2006.
- Morgan, Kathleen : Is autism a stress disorder? What studies of nonautistic populations can tell us., Baron, M. Grace et al. (Ed) ,*Stress and coping in autism.*,129-182 , x , 457 , 2006.
- Mueller, David et al. : Dealing With Chronic Absenteeism and Its Related Consequences: The Process and Short-Term Effects of a Diversionary Juvenile Court Intervention.,*Journal of Education for Students Placed at Risk* , **11**(2), 199-219, 2006.
- Muris, Peter : The pathogenesis of childhood anxiety disorders: Considerations from a developmental psychopathology perspective.,*International Journal of Behavioral Development* , **30**(1), 5-11, Jan, 2006.
- Neild, Ruth Curran et al. : An Extreme Degree of Difficulty: The Educational Demographics of Urban Neighborhood High Schools., *Journal of Education for Students Placed at Risk* , **11**(2), 123-141 , 2006.
- Ogliari, Anna et al. : Genetic and environmental influences on anxiety dimensions in Italian twins evaluated with the SCARED questionnaire.,*Journal of Anxiety Disorders*,**20**(6) ,760-777, 2006.
- Orpinas, Pamela; Horne, Arthur M. : Bullying prevention: Creating a positive school climate and developing social competence.,xvi , 293 , 2006.
- Ou, Suh-Ruu et al. : Early Childhood Intervention and Educational Attainment: Age 22 Findings From the Chicago Longitudinal Study., *Journal of Education for Students Placed at Risk* , **11**(2), 175-198, 2006.
- Patchin, Justin W.et al. : Bullies Move Beyond the Schoolyard: A Preliminary Look at Cyberbullying.,*Youth Violence and Juvenile Justice* , **4**(2), 148-169, Apr , 2006.
- Paterson, Erik T. : A "School Phobia" that Wasn't., *Journal of Orthomolecular Medicine* , **21**(2),

68-70, 2006.

Pettit, Jeremy W.; Joiner, Thomas E. : Chronic depression: Interpersonal sources, therapeutic solutions., x , 213 , 2006.

Phares, Vicky et al. : Getting Fathers Involved in Child-Related Therapy.,Cognitive and Behavioral Practice , **13**(1) , 42-52 , Feb , 2006.

Piacentini, John C.et al. : Cognitive-Behavioral Therapy for Youth with Obsessive-Compulsive Disorder., Kendall, Philip C. (Ed),Child and adolescent therapy: Cognitive-behavioral procedures (3rd ed.) ,297-321 , xvi , 528 , 2006.

Pini, Stefano et al. : Social anxiety disorder comorbidity in patients with bipolar disorder: A clinical replication.,Journal of Anxiety Disorders , **20**(8) , 1148-1157 , 2006.

Reaven, Judy et al. : The Parent's Role in the Treatment of Anxiety Symptoms In Children With High-Functioning Autism Spectrum Disorders.,Mental Health Aspects of Developmental Disabilities, **9**(3) , 73-80, Jul-Sep, 2006.

Reid, Ken : An evaluation of inspection reports on primary school attendance., Educational Research , **48**(3) , 267-286 , Nov , 2006.

Ross, Penelope; Cuskelly, Monica : Adjustment, sibling problems and coping strategies of brothers and sisters of children with autistic spectrum disorder.,Journal of Intellectual & Developmental Disability , **31**(2) , 77-86 , Jun , 2006.

佐藤正道 1992a 『世界の不登校研究の展望－1980年以降の ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の 文献を中心に』,鳴門教育大学修士論文,p.295

佐藤正道 1992b 『1991年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第2号,91-110

佐藤正道 1993 『1992年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第3号,179-197

佐藤正道 1994 『1993年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第4号,174-187

佐藤正道 1995 『1994年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第5号,156-167

佐藤正道 1996 『1995年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第6号,154-168

佐藤正道 1997 『1996年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第7号,89-104

佐藤正道 1998 『1997年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から－』,鳴門生徒指導研究 第8号,181-203

佐藤正道 1999 『1998年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL

- ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 9 号,100-121
- 佐藤正道 2000 『1999 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 10 号,86-109
- 佐藤正道 2001 『2000 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 11 号,94-122
- 佐藤正道 2002 『2001 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 12 号,60-85
- 佐藤正道 2003 『2002 年の世界の不登校研究の概観－ ERIC および PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 13 号,142-170
- 佐藤正道 2004 『2003 年の世界の不登校研究の概観－ PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 14 号,74-109
- 佐藤正道 2005 『2004 年の世界の不登校研究の概観－ PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 15 号,53-101
- 佐藤正道 2006 『2005 年の世界の不登校研究の概観－ PSYCHOLOGICAL ABSTRACTS の文献から一』,鳴門生徒指導研究 第 16 号,40-81.
- Schneier, Franklin R. : Social Anxiety Disorder.,New England Journal of Medicine , **355**(10) , 1029-1036 , Sep , 2006.
- Schwartz, David et al. : Popularity, Social Acceptance, and Aggression in Adolescent Peer Groups: Links With Academic Performance and School Attendance.,Developmental Psychology, **42**(6), 1116-1127 , Nov , 2006.
- Seif el Din, Amira : School Influences on Child and Adolescent Mental Health Series: Book series of the International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions.,Garralda, M. Elena et al. (Ed),Working with children and adolescents: An evidence-based approach to risk and resilience.,179-199, xiii, 209, 2006.
- Shirk, Stephen; Karver, Marc : Process Issues in Cognitive-Behavioral Therapy for Youth., Kendall, Philip C. (Ed) .,Child and adolescent therapy: Cognitive-behavioral procedures (3rd ed.), 465-491 , xvi , 528 , 2006.
- SmithBattle, Lee : Helping Teen Mothers Succeed., Journal of School Nursing , **22**(3), 130-135 , Jun , 2006.
- Smith, Mieko K.; Brun, Carl F. : An Analysis of Selected Measures of Child Well-Being for Use at School-and Community-Based Family Resource Centers.,Child Welfare Journal ,**85**(6), 985-1010 , Nov-Dec , 2006.
- Stirling, Lucy J.et al. : Preliminary Evidence for an Association Between Social Anxiety Symptoms and Avoidance of Negative Faces in School-Age Children.,Journal of Clinical Child and Adolescent Psychology , **35**(3), 440-445 , 2006.

- Storch, Eric A. et al. : Factor Structure of the Liebowitz Social Anxiety Scale for Children and Adolescents., *Child Psychiatry & Human Development* , **37**(1) , 25-37, Spr , 2006.
- Suveg, Cynthia et al. : Emotion-focused Cognitive-Behavioral Therapy for Anxious Youth: A Multiple-Baseline Evaluation., *Journal of Contemporary Psychotherapy* , **36**(2) , 77-85, Jun , 2006.
- Thomas, Sandra P. (Ed) : From the editor--The phenomenon of cyberbullying., *Issues in Mental Health Nursing* , **27**(10) , 1015-1016 , Dec , 2006.
- Tobias, Sigmund : The Importance of Motivation, Metacognition, and Help Seeking in Web-Based Learning., O'Neil, Harold F. et al. (Ed), *Web-based learning: Theory, research, and practice.*, 203-220 , xii , 429 , 2006.
- Tsai, Luke : Diagnosis and treatment of anxiety disorders in individuals with autism spectrum disorder., Baron, M. Grace et al. (Ed), *Stress and coping in autism.*, 388-440 , x , 457, 2006.
- van Straten, A. et al. : Stepped care vs. matched care for mood and anxiety disorders: A randomized trial in routine practice., *Acta Psychiatrica Scandinavica* , **113**(6) , 468-476, Jun, 2006.
- Vasa, Roma A.; Pine, Daniel S. : Anxiety disorders., Essau, Cecilia A. (Ed), *Child and adolescent psychopathology: Theoretical and clinical implications.* , 78-112 , xii , 297 , 2006.
- Veenstra, Rene et al. : Temperament, environment, and antisocial behavior in a population sample of preadolescent boys and girls., *International Journal of Behavioral Development* , **30**(5) , 422-432 , Sep , 2006.
- Verdeli, Helen et al. : Review of Evidence-Based Psychotherapies for Pediatric Mood and Anxiety Disorders., *Current Psychiatry Reviews* , **2**(3) , 395-421 , Aug , 2006.
- Voci, Sabrina C. et al. : Social anxiety in late adolescence: The importance of early childhood language impairment., *Journal of Anxiety Disorders* , **20**(7) , 915-930 , 2006.
- Weersing, V. Robin et al. : Effectiveness of Cognitive-Behavioral Therapy for Adolescent Depression: A Benchmarking Investigation., *Behavior Therapy*, **37**(1) , 36-48 , Mar , 2006.
- Whitton, Sarah W. et al. : Cognitive-Behavioral Treatment of Generalized Anxiety: Disorder and Vomiting Phobia in an Elementary-Age Child., *Clinical Case Studies* , **5**(6) , 477-487 , Dec , 2006.
- Wood, Jeffrey : Effect of anxiety reduction on children's school performance and social adjustment., *Developmental Psychology* , **42**(2) , 345-349 , Mar , 2006.
- Wubbels, Theo et al. : Teacher interpersonal competence for Dutch secondary multicultural classrooms., *Teachers and Teaching: Theory and Practice* , **12**(4) , 407-433 , Aug , 2006.
- Yampolskaya, Svetlana et al. : At-Risk High School Students in the "Gaining Early Awareness and Readiness Program" (GEAR UP): Academic and Behavioral Outcomes., *Journal of Primary*

Prevention , **27** (5) , 457-475 , Sep , 2006.

Zvolensky, Michael J. et al. : Risk-factor research and prevention programs for anxiety disorders:
A translational research framework.,Behaviour Research and Therapy, **44** (9) , 1219-1239, Sep,
2006.

<英文タイトル>

A Review of the Studies about Non-Attendance at School,School Phobia,and School Refusal in the World (2006) :SATO,Masamichi